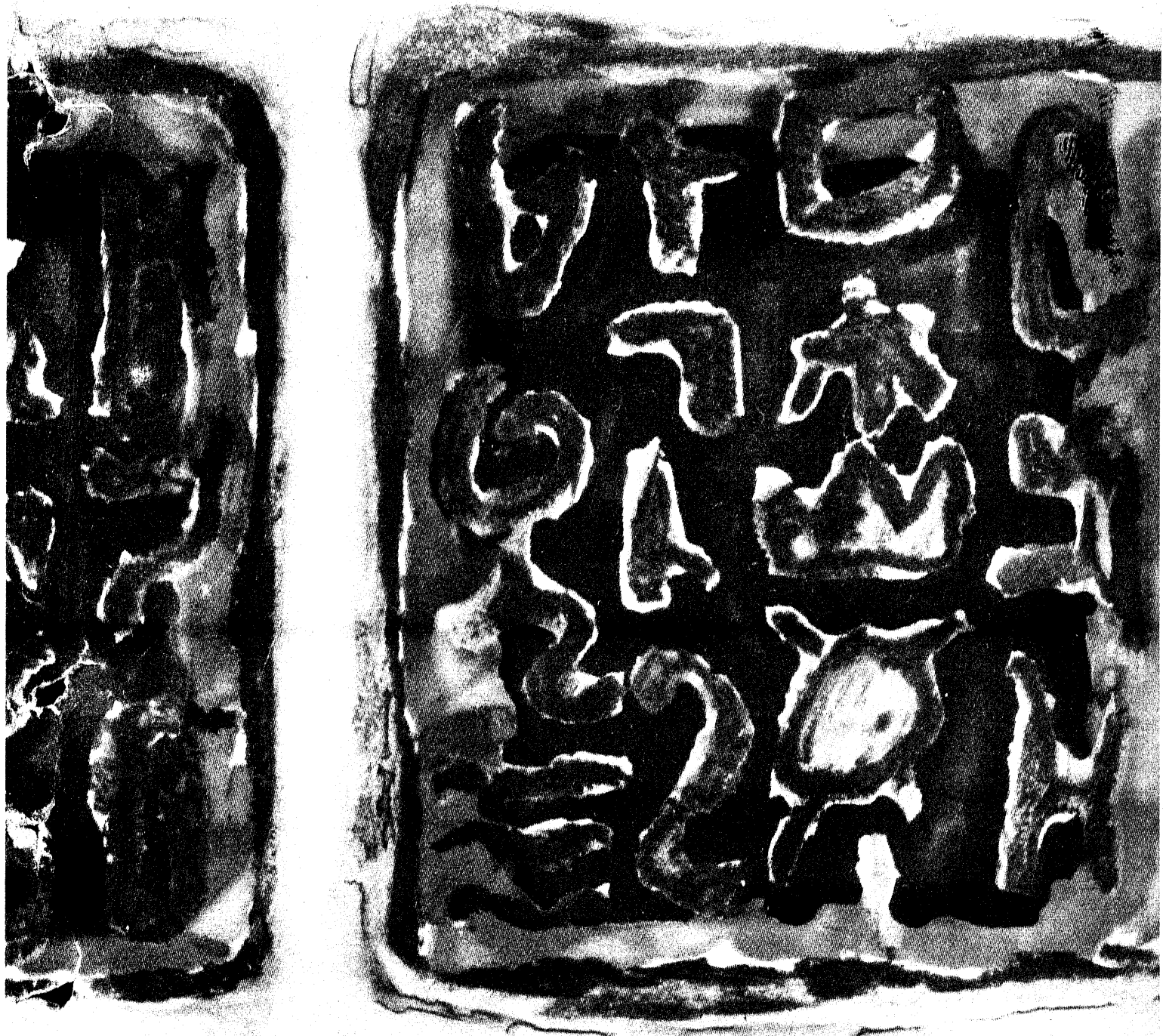


国語問題問答

第五集

国語シリーズ 33



文 部 省

刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語の改善と国語教育の振興に関する施策を普及するために編集するものであります。

このシリーズは、国語問題編・国語教育編・国語生活編・国語教養編および資料編に分け、問題編は主して国語審議会の発表した事がらを、教育編は国語学習指導の方法などを、生活編は国民の言語生活に関する事がらを解説するものであり、教養編は一般の国語教養を高めることを、資料編は国語改善と国語教育に関する基礎資料を集録することを目的としたものであります。

すでに教育編は 10 冊，問題編は 8 冊，生活編および教養編はそれぞれ 5 冊，資料編は 4 冊を刊行しましたが，各編にわたって今後もひきつづき刊行する予定であります。

この「国語問題問答」は、国語の問題について、広く各方面から寄せられる質問にそのつどお答えしてきたものをもととして、毎年編集してきましたが、このたび、国語問題編の 9 冊目として、この第 5 集を編集しました。

なお、付録として、昭和 31 年 7 月 5 日国語審議会から建議された「話しことばの改善について」付「話しことばについて」(国語審議会第 2 部会長説明) および同日国語審議会から報告された「国語教育におけるローマ字教育について」ならびに国語改善に

関する略年表などを添えました。

昭和 32 年 2 月

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

目 次

第1部 質疑応答

1 音訓について.....	1
2 漢語の読み方について.....	2
3 漢語と漢字について.....	4
4 固有名詞について.....	7
5 字体について.....	8
6 略字について.....	16
7 漢字の学習について.....	18
8 教育漢字の学年配当について.....	19
9 現代かなづかいについて.....	21
10 送りがなについて.....	27
11 漢字とかなの用い方について.....	31
12 標準語について.....	34
13 敬語について.....	41
14 外来語について.....	42
15 くり返し符号について.....	44
16 そ の 他.....	45

第2部 資 料

話しことばの改善について（建議）.....	47
付 話しことばについて（国語審議会第2部会長説明）.....	49

国語教育におけるローマ字教育について（報告）	63
国語改善に関する略年表	
（１） 当用漢字表・現代かなづかい関係	65
（２） ローマ字教育関係	80
当用漢字音訓表の音訓数	94
当用漢字字画順表（案）	99
昭和 31 年度国語教育研究協議会の記録	105
国語シリーズ収録資料目録	113
「国語問題問答」（第 1 集～第 5 集）総索引	117

第 1 部

質 疑 応 答

1 音訓について

1 音だけの字

【問】 1音だけの字はどれだけありますか。

【答】 当用漢字 1850 字中、1音だけの字は 785 字です。なお2音だけの字は 59 字あります。

「当用漢字音訓表の音訓数」をこの本の第2部資料編にあげておきましたから、詳しいことはそれをごらんください。

「菊」は音か訓か

【問】 「菊」は音ですか、訓ですか。

【答】 ひとくちに音といい、訓といい、そしてそれで大多数は問題なく通用するのですが、中に少数、説明を要するのがあります。お問合せの「菊」も実はその一つなのです。

というわけは、これは [kik] という1字1音節の漢語であつたのを、やまとことば（固有の日本語）ふうに [ki-ku] として取り入れたのです。それで、いわば昔の外来語なのですが、それが普通にはわからないくらいに耳に熟しているので、その点から「語感的やまとことば」といってよいものです。しかし、もとは漢字の音からきたのですから、語原的に

は字音です。

2 漢語の読み方について

合 評 会

【問】 「合評会」の読み方は「がっぴょうかい」か「ごうひょうかい」か。

【答】 「合併」^{がつぺい}「合宿」^{がつしゆく}などの例で「がっぴょうかい」が妥当でしょう。「合」^{ごう}を熟語で「合——」^{がつ}と使ってさしつかえないことは、当用漢字音訓表の「使用上の注意事項」にも例に示されています。

障 子

【問】 「子」は音「シ」ですが、それを「障子」と書いて「しょうじ」と読めますか。

【答】 読めます。一般に漢和辞典でも、当用漢字音訓表でも、漢字の音は基本の読み方を示しているだけで、それが熟語で濁って読まれることがある（いわゆる連濁の現象）のは当然のことと認められているのです。たとえば、

子 し

障子 しょうじ

星 しょう 明星 みょうじょう

井 しょう 天井 てんじょう

この「星」「井」も「セイ，ショウ」とだけ当用漢字音訓表に示されていますが，それを熟語で上のように濁って読みます。

また次のような例もあります。

生 せい 平生 へいぜい

済 さい 経済 けいざい

僧 そう 小僧 こぞう

芸術・美術・技術

【問】 「芸術・美術・技術」などの語にふりがなをつける場合，すべて「術」を「じつ」にしてはいけませんか。

【答】 口頭の発音では「じつ」といっていても，この字の音は当用漢字音訓表に「ジュツ」と定められていますから，やはり「じゅつ」と書くべきです。また，「慶応義塾」や「新宿」なども，実際には〔ギジク〕〔シンジク〕ということがあっても，かなで書くときには「ぎじゅく」「しんじゅく」です。それに「塾」の1字ではいつでも〔ジュク〕と発音します。

3 漢語と漢字について

「学級編制」と「学級編成」

【問】 「学級編制」と「学級編成」との両方を見受けますが、どちらがよいでしょうか。

【答】 学校教育法に「設備、編制」とあるのを受けて、同施行令（第23条6号に「学級の編制」とあり、また同施行規則（第19条）に「一学級に編制する」とありますから、どちらかといえば「編制」のほうが根拠があります。したがってもし統一するとすれば「編制」のほうによるのが当然でしょう。

ただし、学習指導要領一般編に「教育課程編成」とあるように、この「編制」と「編成」とは一つの熟語としてあまり違った意味の語ではありませんから、かりに「学級編成」と書いても誤りだとはいえません。ただ、法規的にいって「編制」のほうによりどころがあります。

「繁殖」と「蕃殖」

【問】 天然記念物の「蕃殖地」または「繁殖地」は、「蕃」「繁」いずれを用いるのが適当でしょうか。

【答】 「蕃殖」と書くのが古い文献に見えますが、すでに国語辞典、漢和辞典ともに「繁殖」という書き方をあげています。

それで将来は「繁殖」と書いてじゅうぶんに間に合うというところから、「蕃」は当用漢字表にも採用されていません。したがって「繁殖地」でよいと思います。元来「繁」と「蕃」とは字原的には違いますが、音がまったく同じなので、古い文献にも通用している例があります。

なお、この「繁殖」という用字法は法令にも用いることになっています。

「天守閣」と「天主閣」

【問】 城の「天守閣」と「天主閣」とはどちらが正しいでしょうか。

【答】 語原は「天主閣」であると考えられていますが、相当に古くから「天守閣」と書き伝えられていますから、それでよいと思います。これについては大言海に詳しく述べてあります。

付記：はじめはキリシタンの「天主」を祭って天主閣といったのを後に避けて天守閣と書き、かつ毘沙門天^{びしゃもんてん}を祭るようになったらしいというのが現在の通説です。

「埜」という字

【問】 わたしたちの地方に「^{しおやま}埜山」という地名があり、したがって「塩」も「埜」と書くのが普通ですが、それを学校で書いたらバツテンをつけられました。

【答】 地名として「埆山」と書くのは固有名詞の問題です。これをもってきて一般に塩の字に埆と書くのは問題です。

「塩」が全国に通用する現在の標準字体です。それを地方の習慣に従って「埆」と書くのは、いわば一種の方言みたいなもので、その地方だけで生活する場合にはさしつかえありませんが、ひとたび日本全国を相手に活動しようとする場合には、それでは通用しません。学校は、ことばでも文字でも、すべて全国共通のものを覚えさせるのが目的ですから、原則として「埆」でなく「塩」と書くように教育するのが正しい筋道です。その上で、その地方だけでの実際生活に「埆」を用いるのはさしつかえないでしょう。

漢和辞典の部首

【問】 漢和辞典を見ますと、最初に 214 の部首がついています。

普通部首には「へん・つくり・かんむり・あし・たれ・にょう・かまえ」の七つがあるといわれていますが、それに 214 の部首がはっきりと割りあてられるものでしょうか。

【答】 部首には、へんや、つくりの一つに専用するものと、それらの二つ以上に兼用するものとがあります。たとえば、

1 専用するもの

へんに専用するもの 例 亻 彳 扌

つくり “ 例 冫 欠 爻

かんむりに専用するもの	例	𠂔	𠂔	𠂔
あし	〃	例	𠂔	𠂔
たれ	〃	例	𠂔	𠂔
にょう	〃	例	𠂔	𠂔
かまえ	〃	例	𠂔	𠂔

2 二つ以上に兼用するもの

例	土	地	杜	墨
例	言	話	信	警

以上のように専用のもので兼用のものがありますので、全部をはっきりとは振り分けられません。

4 固有名詞について

児童の氏名の字体

【問】 小中学校における「学習指導要録」に児童生徒の氏名を記載する場合、戸籍に記載されているまま、旧字体や誤字までも訂正せずに書くか、それとも新字体で、たとえば「渡邊徳藏」を「渡辺徳蔵」というふうに書くか、どちらがよいでしょうか。

【答】 昭和 27 年 4 月 4 日、内閣閣甲第 16 号依命通知によって各省庁へ配付された「公用文作成の要領」中、第 1 の 5 「人名の書き表わし方について」の 1 に次のようにあります。

- 1 人名もさしつかえのない限り、当用漢字字体表の字体を用いる。

それで、なにか特別の事情がある場合はともかく、そうでないかぎりには新字体によって書いていいと考えられます。

履歴書の字体

【問】 人名の字体は、たとえば「濱」「廣」などのように旧字体で履歴書を書けというところがありますが、これについてどう指導したらよいでしょうか。

【答】 普通には、公用文のほうでも特別の必要がないかぎりには新字体でよいことになっています。したがって履歴書でもそれでよいわけですが、採用者側で特にそう希望するのならばそれに従うべきでしょう。したがって旧字体も、戸籍にのっている自分の氏名の文字の字体だけは覚えておくように、一応指導すべきでしょう。その上で、特別の必要がないかぎり、普通には新字体を使うというのが妥当な線だと思います。

5 字体について

新字体と字原

【問】 新字体は字原と関係が少なくなっているので、漢字教育上

に困っています。この点をどう思われますか。

【答】 漢字の大多数についていちいち字原を説くには旧字体でもまだ足りないので、少なくとも篆書にまでさかのぼらなければなりません。

義務教育における漢字の教育に字原的説明を応用できるのは、ごく限られた少数のもので、その限度を逸脱するとかえって有害な面もあります。

「道」という字は「首」にしんにゅうと分解して教えればよいのであって、なぜ「首」にしんにゅうで道という意味の字になるのか、あるいは「女」へんに「又」を書いてなぜ「奴隸」の「奴」になるのかというようなところまで説明して指導する必要はないでしょう。

「山」とか「川」とか「木」とか「林」とか、ごく基本になる象形・会意の文字と、それに簡単な指事や形声の漢字構成法を、ある程度、学習者に興味のある範囲内で説明するのが限度でしょう。そのへんを心得た上で適宜に字原的説明から導入するのはけっこうなことだと思います。その点では現在の新字体表でも不自由はないと思います。

分

【問】 「分」は、「分」ですか「分」ですか。

【答】「分」は、御承知のように「八」と「刀」との合字であり、その「八」は、活字体では、第2画の頭を軽くおさえる筆意を示しかたがた、活字の細画保護のために「八」のようにヒッカケをつけたものであります。

当用漢字字体表は字の骨組を示したものですから、それを実際に各種書体の活字に適用する場合には、それぞれの活字体の特質に従ってデザインしてよいわけであり、それが明朝^{みん}体では「八」となっているわけです。それで「八」は「入」ではなくて、やはり「八」の心持なのです。なお「入」のヒッカケは「人」と分つために絶対必要なものです。

以上のようなわけで、活字体としては新旧で少しも変わりがないわけであります。

備考：明朝体とは、もと中国の明の時代にできた活字の書体をもとにして、日本の明治時代に完成したもので、今日、普通に新聞著書などに使われているものです。よこ線が細く、たて線が太いなどのところに特徴があります。

吉

【問】 わたしの友人に次の名のものがあります。

吉田 (よしだ) 正吉 (しょうきち)

吉郎 (よしろう) 兼吉 (けんきち)

これについて疑問をもったわたしは、先輩に尋ねたところ、「吉」が「よし」で「吉」が「きち」だと教えてくれました。

た。しかし新聞などには「吉」を「よし」とも「きち」とも読む場合に使っています。

また、ある辞典には「吉」は「きち」で訓よみなしとあります。そして「吉」の字はのっていません。

いずれが正しいか、教えてください。

【答】 元来は「吉」が正しく、その音が「きち」で、訓が「よし」です。それを古い時代には中国でも日本でも、「吉」とも通俗に書いたのですから、やはりそれも「きち」「よし」と読まれるわけです。

それで戸籍簿の記載には「吉」「吉」の両方があり、以前は官報などにも活字を使い分けたこともあります。当用漢字字体表が公布になってからは、たとえ戸籍簿には「吉」とあっても、実用上には「吉」で正式に通ることになりました。

学校教育でも「吉」だけを教えています。もっとも「書道」の上で「吉」と書いている手本などもありますが、これは「書取」や「習字」とは別です。

以上のようなしだいですから、これからは戸籍上で「吉」の字の人でも、日常の社会生活では「吉」の字体を使ってよいのです。

なお、ある辞典に「訓なし」とあるのは、たぶん当用漢字音訓表にないという意味であって、その当用漢字音訓表は普

通の文章を書く上での音訓を決めたものですから、固有名詞としての読み方としては「吉」の「よし」も、また「神^{かん}言^ぎ」のような姓における「き」の読み方もあるわけです。

監

【問】 「監」の字の右かたを「ケ」にしたのと、その「ノ」を「一」にしたのと、どちらがよいか。根拠を知らせてください。

「監」はもと「臥」と「血」の合字ですが、その「血」のものの形は、「^{きち}皿」の中に血がはいっていることを示した「皿」ですから、上の1画は「一」でも「ノ」でもよいのです。そしてその「ノ」も「一」も上の「一」から出たのです。それを活字体では「血」にしましたが、書道では昔から和漢とも多く「一」に書いていますので、そのほうに新字体は統一されたのですから、これからの活字体は「一」になります。

満

【問】 「満」ですか「満」ですか。

【答】 「満」です。つくりを「くさかんむりに両」と覚えれば便利です。

感

【問】 「感」か「𠂔」か。

「盛」などの字との関係から、実際指導では「感」のほうがいいということですが。

【答】 そういう意味で「感」のほうが新字体に採られたのです。

、ただ書く上では「𠂔」のほうが速いというので、習字の手本には多くこのほうが見受けられます。それゆえ、基本的には活字体どおりに「感」と考えておき、その上で習字で「𠂔」と書くことも認められてよいでしょう。書取でも「𠂔」を誤りだとはいえません。

内

【問】 辞典や新聞・雑誌や教科書に、「内」という形と「𠂔」という形とがあって不統一ですが、今日としてはどちらが標準ですか。

【答】 元来は「𠂔」ですが、それを筆写体で和漢とも多くは「内」に書いた例があるので、それを採用して、当用漢字字体表で正式に「内」を標準の形として認めたのです。

教科書ではすでに「内」に統一されていますが、その他の一般出版物でも、おいおい「内」に統一されていっていま

す。ただ、なにぶんにも漢字には大小さまざまの母型を必要としますので、その間に食い違いがあったり、またある種の出版物にはまだ全部、旧字体の活字を使っているのがあったりして、今日のところすっかり統一されてはいない現状です。

くさかんむり

【問】 わたしは、くさかんむりの字体について「艸」でも「𦰩」でもよいと教えられてきましたが、近来「𦰩」ではいけないということを聞きます。いかがですか。

【答】 くさかんむりは、古く6画の「艸」から4画の「𦰩」に簡易化されましたが、それをさらに3画の「𦰪」に簡易化させたのが新字体です。それゆえ、一応「𦰩」を標準として活字体も統一し、教育もそれに従っているわけですが、書道の上で4画の「𦰩」に書くことはさしつかえありません。ただ、これからの字典では、くさかんむりは3画のところに置くことにもなることを知っておく必要があります。

しんにゅうの書き方

【問】 しんにゅうの「𠂔」は旧字体の「𠂔」の筆写体であると思いますが、そうすると新字体の「𠂔」ではどう書くのが正しいでしょうか。

【答】 「え」は「疋>え>え」となったもので、活字体の「え」よりも一足さきに「てん」一つにしていたのです。それへ活字体があとから同調して「え」となったのですから、筆写体でえと書くのはもとのままでいいわけです。

脳

【問】 「脳・悩」は、つくりの「ツメ」は離れているのですか、くっついているのですか。活字によってまちまちです。

【答】 離れているのが昭和 24 年 4 月 28 日内閣告示第 1 号「当用漢字字体表」による新字体です。くっつけている活字のあるのは、以前、昭和 13 年に国語審議会から発表された字体整理案ではそれがくっついていたので、その時に造られたものが、今日でも残っているものかとも思いますが、おいおいに整理されていく実状にあります。

しんにゅうの画数

【問】 しんにゅうは何画に数えるべきですか。

【答】 旧字体でならテン二つで 4 画ですが、新字体ではテンが一つですから 3 画です。したがって「道」は新字体では 12 画です。

つまり字体によることですから、その用い場所によって、

自分は新字体によるとか、旧字体によるとかをまず決めておいて、その上で一貫した方針で教えられたらよいと思います。

普通の教育上では、新字体によって3画だと教えてくださいます。

なお、参考に「当用漢字字画順表（案）」をこの本の第2部資料編にあげておきました。

6 略字について

新しい略字

【問】 次のような略字を多く見受けますが、それを正式に認めることはできませんか。

𠂇 𠂈・𠂉 𠂊 斗（斗争，決斗）𠂋 𠂌 𠂍 𠂎 𠂏

【答】 今日のところ、これらを正式に認めて「働・職・簿・闘・属・第・権・機・議」を旧字体であるとすることはできません。実際の手書きやポスターなどに広く使われていても、正字を基本に教えて、必要があればその上で世間では略字として用いられていることを教えることにしたいと思います。

灯

【問】 新聞には「灯」を使っていますが、教科書では新版のものでも従来どおりの「燈」です。国語審議会の決定はどうなったのですか。文部省の方針はどうですか。

【答】 国語審議会では、当用漢字表について審議し、当用漢字補正案を発表しました。この中に「燈」を「灯」とする字体案があります。しかし、この補正案は正式に建議されたものではありませんので、当用漢字表はもとのままであります。したがって、公用文・教科書などは従来のとおり「燈」を用いております。

国語審議会がこの補正案を発表するに当っては、当用漢字表の補正は影響するところが大きいので特に「当用漢字表審議報告について」という文章を添えて発表しました。その発表文の中に「(前略)当用漢字表の補正は、その影響する方面や範囲が広く深いので、この漢字部会の補正資料は、このさい一般の批判をもとめ、今後なお実践を重ねることによって、その実用性と適正さが明らかにされと考えられる。」とあります。新聞で実行しているのはその趣旨からだと思えます。(国語シリーズ 26「国語問題問答第3集」, 第1部 2「当用漢字について」の「当用漢字表の補正について」参照。)

7 漢字の学習について

門 と 内

【問】 わたしは学校の試験答案に「門」を「内」と書きましたが、誤りでしょうか。

【答】 試験の科目と答案を書く上での約束によることです。たとえば作文や理数料の答案に「内」と略字に書いても絶対に誤りとはいえないかもしれませんが、特に「漢字の書取」というような場合には、略字でない形を書くのが常識です。ただし、おなじ書取といっても、その問題の性質によっては、略字を減点にすることも、または零点にすることも、あるいはそのまま認められることもあります。そのへんは場合によることです。が、とにかく「書取」の試験には正しく「門」と書くのが原則です。

音だけの漢字の指導

【問】 当用漢字の中で、たとえば「亜」とか「信」とか「則」とかのように、訓がなく、音だけの字は、どういうふうに指導したらいいでしょう。

【答】 このような例ばかりでなく、一般に「字」は「語」によっ

て教えるのが原則的な行き方です。したがって、「信」は「信じる」「信用」など、「則」は「法則」「規則」など、「厶」は「厶熱帯」「厶鉛」などの語に即して教えるわけです。そのうえで、「厶」は「つぐ」という意味をもつことを教えていきます。しかし、これは意味であって訓ではありません。したがって、「つぐ」という語を「厶ぐ」などと書きません。これは「失敗」の「敗」でも同じことです。「敗」には「まける」という意味はあっても、訓は「やぶれる」としてしかありません。したがって「負ける」と書き、「敗れる」と書くわけです。

8 教育漢字の学年配当について

【問】 今度、文部省で決めたという教育漢字の学年配当について、作成に至るまでの経過、実施の方法、内容などについて、概略をお知らせください。

【答】 これについては昭和 30 年 3 月に国語シリーズ 24 「漢字の学年配当」という名で中間報告の発表があり、また昭和 32 年 7 月に全体の調査報告も出ましたから、ここでは、ごく概略だけ申しあげておきます。

〔調査の経過〕

戦後、各種の検定教科書間の漢字の提出順位がまちまちなために、学習指導上困るという声が聞かれるようになりましたので、文部省では昭和 27 年 3 月、調査普及局内に漢字学習指導研究会を設けて、その解決策の研究を始めました。そして、同年 9 月までに、まず教育漢字 881 字を小学校の 6 学年に配当した「学習漢字学年別配当試案」を作り上げ、東京都内に 12 の実験学校（12 学級）を委嘱して、実際の学習指導に適用してもらいました。次の昭和 28 年度には、都内と近県で 16 の小学校（18 学級）を実験学校に委嘱し、さらに昭和 29 年度には全国各ブロックから 1 校ずつ計 7 校（89 学級）を委嘱して実験指導を行いました。このようにして実施した 3 か年間の実験指導の成績を整理吟味して、昭和 30 年 8 月に、さきに決めた配当試案の修正案を作り、これを文部省の内外の関係方面へ示して、実際指導上の意見を尋ねました。そして、さらに修正を加えて昭和 31 年 1 月に「教育漢字学年別配当表」を決定したのです。

なお、この間、昭和 30 年 12 月には、田中文部事務次官が国会の衆議院行政監察委員会で、この問題についての質疑に対し、「文部省といたしましても、その検討を目下いたしているのでございます。いずれ近くだいたいの成案を得る見通しも立っておりますので、漢字の問題については何か結論を得、解決を見るのではないかという希望をも

っております。」と答えています。

〔配当表の実施〕

この配当表の実施については、まだ具体的な方法は決ま
っていませんが、昭和 31 年 5 月、教育課程審議会から文
部大臣に、下記のような答申が提出されました。

教育漢字の学年配当について（答申）

本審議会は、教育漢字（当用漢字別表）の学年配当に
ついて慎重に審議した結果、次の結論に到達しましたの
で、答申いたします。

記

小学校において教育漢字（当用漢字別表）を学年別に
配当する方針をとることは適當である。ただし、この学
年配当は、なお研究を要するものであり、国語科をはじ
めとして全教科の学習指導上ならびに教科書編集上に影
響するところが大きいから、ある程度の幅を持たせるな
ど、その取扱いには慎重を要する。

9 現代かなづかいについて

「は、へ、を」の除外例

【問】 かなづかいにおける「は、へ、を」の除外例を撤廃する
ということは考えられないものでしょうか。ローマ字では

“wa, e, o” 一本ですっきりとしています。この除外例のために、低学年では相当に努力と時間とを費しています。この除外例をやめれば作文能力がうんと伸びると信じます。

【答】 今日のところ、この除外例をやめて「わ、え、お」一本にすることは考えられておりません。「は、へ、を」の指導については、低学年のうち、初めは「わ、え、お」と書くのを多少寛大に見て、かながだいたい全部、正しく速く書けるようになってから、徐々に「は、へ、を」の除外例に導いていくような手心を施すことなども考えられましょう。児童は作文に「わたしわ」と書いても、読むものにはみな「わたしは」とあることに自分で気づくことなども、およそ、それと平行していくのではないのでしょうか。ただし、こういう実際的な点は一律にいきませんし、またひとりの経験を全般に及ぼすわけにもいきませんから、そこは現場の先生がたの指導力にまたなければならないところです。ただ、ことばの習得は、一般的に聞くことが先で話すことはあと、読むことが先で書くことはあとというふうに、発動面・表現面が受動面理解面よりも少しずつ遅れていくのが自然ですから、この「は、へ、を」の除外例の問題も、そのつもりで気長く指導していくべきではないかと思われます。

「じ、ぢ」「ず、づ」の書き分け

【問】 「じ、ぢ」「ず、づ」をはっきり区別している地方では、それを表記に表わしていいということになっていると聞いていますが、その根拠はどこにありますか。また、現代かなづかいの考査で、そうした地方の生徒が「じ、ぢ」「ず、づ」を書き分けるたてまえで答えたときにはどうなりますか。

【答】 「現代かなづかい」の「注意一」に次のように書いてあります。

「クッ・カ」「グッ・ガ」および「ヂ・ジ」「ヅ・ズ」をいい分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。

この「注意一」は、その地方かぎりの許容事項ですから、全国共通の立場で行われる考査に対処しては、やはり本則どおりに、2語連合の場合以外は、すべて「じ」「ず」一本の原則で答えるべきです。ことばでも文字づかいでも、すべて全国的に通用する形を教えるのが学校教育では必要です。なお、考査問題提出に当っては、そういうことをよく考慮しておくことは当然のことです。

「藤原」のふりがな

【問】 わたしは、自分の姓の「藤原」に、必要に応じて「ふちは

ら」とふりがなをつけてきましたが、今度、孫を幼稚園に入れましたら、「ふじわら」と書くとのことでした。孫もすでに気づいて不審に思っています。どちらが正しいでしょうか。

【答】 「藤原」を、わたしたちは〔フジワラ〕と読みますが、古くは〔フヂハラ〕と読んでいました。（その〔ヂ〕も〔ハ〕も今の〔ヂ〕や〔ハ〕とは少し音が違ったと考えられていますが、それはしばらくおきます。）それで旧かなづかいでは「ふぢはら」と書いたのです。しかし、現代の読み方のおりに「ふじわら」と書こうというのが新かなづかいの趣旨です。このことは、ただ「藤原」だけの問題でなく、たとえば「栗」の「あわ」も「泡」の「あわ」も、みな「わ」で書くようにしようというのです。（旧かなづかいでは、それを栗の「あは」と泡の「あわ」とに書き分けるのですが、それは一般的にはむずかしいと認められるからです。）

この新かなづかいは、昭和 21 年 11 月 16 日の内閣告示第 3 号で発表され、今日では法律・公用文も教科書もすべてこれによっています。

それで、お孫さんの場合でも、幼稚園で「ふじわら」と書かれていると思います。

付記：実際に〔イシハラ〕と読む姓の「石原」などは、新かなづかいでもそのとおりに「いしはら」と書くのです。

「志津子」のふりがな

【問】 「志津子」の名まえにふりがなをするとき、「しずこ」と「しづこ」とどちらがよいでしょうか。

【答】 「志津子」さんが、かりに「静子」さんであったとして、それにふりがなをつけるか、またはかな書きをするときには、「しずこ」と書かれるでしょう。それを思えば、すべての場合に通じて「しずこ」と書かれてもよいと思われれます。

ただし、この「志津子」は「志」^{こころざし}と「津」^つという漢字の意味を意識してつけた名だから特別だ、とすれば別です。そうではなくて、単に旧かなづかいの万葉がなを使われたものだとすれば（志と津とでは一般に熟語にはなりませんので）、やはり「しずこ」でよいと思います。ローマ字では Sizuko と書くことも一つの参考となりましょう。

「国旗」

【問】 「国旗」のかなづかいは「こくき」ですか「こっき」ですか。

【答】 一字一字の音に即して読めば「こくき」ですが、実際の発音では〔kokki〕です。旧かなづかいでも、「こつき」が認められてきました。現代かなづかいでは「こっき」です。

「ちえっ」

【問】 「ちえっ」と舌うちするなど、こう書いてもよいでしょうか。

【答】 けっこうです。それから外来語のチェックなどもそうです。

「世界じゅう」と「世界ちゅう」

【問】 「世界中」の「中」をかなで書けば「世界ちゅう」ではありませんか。教科書にはみな「じゅう」となっていますが、1年生の父として迷っています。

【答】 「…中」という「中」は、もとは、熟語として「ちゅう」が「ちゅう」に濁ったもの——すなわち連濁といわれるものですが、今日では、すでに「じゅう」と発音する一種の接尾語に転じて、語原とは離れてきているので、かなでは「じゅう」と書くことになっているのです。

「本則」ということ

【問】 「現代かなづかい」の備考第八に、
オ列^{よう}拗音の長音は、オ列拗音のかなにうをつけて書くことを本則とする。

とありますが、この本則に対する例外的な書き方は何か、お示してください。

【答】 たとえば「小学校」の「小」は「しょう」と書くことを本則とし、これを「しょお」と書くことがあるという意味です。したがって社会が「しょお」と書いてもあえてこれを誤りとはしないという含みで「本則とする」とあるのです。ただし、教育上では一般に本則によることを原則としてきていますから、現代かなづかいでも「しょう」に一定して教科書には書いてあります。

10 送りがなについて

「現われる」と「現れる」

【問】 「現われる」と「現れる」という二つの送りがながあるのはどういうわけですか。

【答】 「現」の1字で「あらわれる」という意味があるからです。それを漢字かなまじり文に乗せて使うとき、その読み方をも示すために「現われる」とか「現れる」とかと書くのですから、書く人の見識によって若干の出入りがあるわけです。この例のような場合に、ぜひこうでなければならないという絶対的なきまりはなく、普通の文章ではまずこうしようという約束以上には決められないところに、この送りがなの問題のむずかしさがあります。ただ、その時代の文章のたいたい

から、おおよそ常識的な目やすは立てられます。たとえば、以前は「あらわす」「あらわれる」を「表す」「現れる」と書いたのが普通でしたが、今日では「表わす」と「現れる」または「現われる」と書くようになってきています。

「明かるい」と「明るい」

【問】 「明るい」「明かるい」のふたとおりの送りがなが現に教科書や新聞などで行われています。これについて、どう説明したらよいでしょうか。

【答】 前にもお答えしましたが（国語シリーズ14），重ねてこの集でもお答えしておきます。

「明」の字で「あかるい」という意味があるのですが、それを漢字かなまじり文の中に表わすために送りがなをするのであるということを説明して、それに必要でじゅうぶんな限度は「明るい」である——すなわちこう書いておけば「あかるい」とよりほかに常識的には読みようがない——ことを納得させます。

その上で、「明かるい」と書く送りがなの説明をすればよいと思います。なぜこうした送りがなをする方式ができたかというに、それは「明ける」という他の語と対照して、こちらにも、「明かるい」と書くという考え方によるのです。すなわち、

明 { かるい
ける

で、この方式で行きますと、これまで「明らか」と書いているのも「明きらか」でなければならないということになり、現にそうするのがよいという主張もあるほどです。かようなわけで送りがなの問題はなかなかむずかしい点があります。

送りがなの指導と文法との交渉

【問】 送りがなの指導で、動詞の自他や活用の違いなどまで立ち入らなければならないでしょうか。

【答】 自動詞・他動詞とか活用とかの名まえを授けることは別として、その事実には多少とも自然にふれることになりましょう。たとえば「集める」に対する「集まる」にしても「集る」にしても、「を集める」と「が集まる（または集る）」というだけの違いは、どちらの送りがな（集まると集る）を採用にしても、自然に話がふれていくだろうと思います。ただ、積極的に指導するのは学年によって判断しなければならず、現に教科書の上でも表記法の問題の取り上げ方で配慮されているようです。

「書留」か「書き留め」か

【問】 「書留」は「書き留め」と書くのですか。

【答】 動詞としては「書き留める」と送りがないをしますが、それが名詞となり、特に「書留郵便」「書留小包」などのように世間での習慣の固定したものは、わざわざ送りがないをしないで「書留」と書きます。

「埋める」

【問】 「埋める」と書いて「うめる」「うずめる」と両方に読めますが、これを送りがないで読み分けさせますか。

【答】 当用漢字音訓表では、「埋^うめる」だけを認めて、「うずめる」はかなで書くことになっています。

公用文の送りがない

【問】 送りがないがまちまちですが、それについて公用文ではどうなっていますか。

【答】 昭和 27 年 4 月 4 日、内閣閣令第 16 号依命通知で各省庁に通達された「公用文作成の要領」の付録に載っています。その全文は、国語シリーズ 21[°]「公用文の書き方資料集」に載っています。

明治 40 年刊「送仮名法」

【問】 明治 40 年刊、国語調査委員会編の「送仮名法」は、現在

でも準拠すべきものでしょうか。

【答】 当時は文語文を「普通文」といていた時代であり、したがって「送仮名法」も文語文を対象として立案されたものですから、今日の口語文にはそのままでは適用されないところが出てきています。

11 漢字とかなの用い方について

「こども」

【問】 「こども」は従来「子供」と書き慣れてきましたが、近來、「小供」と書いて、これでよいという人があります。わたしはそれをいけないと思いますが、どうでしょうか。

【答】 「こども」の語原的意味は「子」の複数で、単なる少年児童という意味ではありません。が、今日ではまったく少年・児童という意味になりきっています。それで誤って「小供」などという書き方もできたのでしょう。

ところで、それを「子供」と書くのもあて字でしょう。なにも「お供」という意味はないのですから、そこで近來は、そのあて字であるということのを避けて、教科書では多く「子ども」または「こども」と書くようになりました。

これは「言葉——ことば」の書き方とならんでよく問題になるのですが、今日、文部省の出版物には「こども」「ことば」と書くことにしています。

「挨拶」「親切」「大切」「大事」「出来る」

【問】 「挨拶」「親切」「大切」「大事」「出来る」など、このように書いてよろしいか。

【答】 「挨拶」は2字とも、当用漢字表にのっていない漢字ですから、かなで「あいさつ」と書きます。

「親切」は、「深切」から出た語なのですが、普通に「親切」と書いて広く行われていますので、現代では「親切」と書いてけっこうです。

「大切」も「大切」と書けますし、「大事」も「大事」と書けますが、「ごたいせつに」「おだいじに」というふうになで書き、そして「大事」は「大事にいたらないですんだ」というような場合に用いることにすれば、どちらも生きてくると思われまゝす。副詞はなるべくかなで書くというのが当用漢字表の趣旨です。

「出来る」は「できる」とかなで書くほうがよいと思います。今日、ある地方では「出来る」を文字どおりに「出て来る」という意味に使っていますが（そしてその方言を表わすためにはそう書くほうがよいでしょうが）、現代の標準語とし

では「出来る」は原義を離れて可能の意味になっていますので、「できる」とかなで書くのが妥当です。

「句読法」と書けるか

【問】 当用漢字音訓表によると、「読」の字の音は「トク・ドク」とありますから、「句読法」は「句とう法」と書くべきだと思いますが、いかがでしょう。

【答】 お考えのとおり、「句とう法」と書くか、「句^{とう}読法」とふりがなをつけるかにします。

「句^{とう}読法」の「^{とう}読」は、特に「とう」という音で読むのですから、たとえば「^{ごう}合」の「^{がつべい}合併」や「^{かね}金」の「^{かな}金物」などの例とは同じに考えられません。漢字のほうでは古く「句^{とう}投」とも書いたものです。

なお、今日、「句」と「^{とう}読」とを逆に取り違えて考えている人もあるように、この語はしだいに過去のものとなろうとしています。今日は「くぎり符号」または「くぎり」という名が用いられるようになってきています。

かたかな書きの範囲

【問】 わたしは、これまで、かたかなは外国語・外来語・擬音語だけに使うものと了解していましたが、現行各種の検定教科書では必ずしもそうばかりではありません。これについては

どう考えたらよいでしょうか。

【答】 教科書によっては、たとえば動植物の名はかたかなで書くというような原則によっているのもあるようですし、そのへんは編集者の見識によっているのです。

小学校学習指導要領国語科編第3章（2）の9項に、

9 かたかなは、だいたい次のような場合に指導することが適切である。

（1） 外国語・外来語。

（2） 外国の地名・人名。

（3） 擬声・擬音。

などの表記を読む場合。

とあります。

以上は指導のいとぐちについて述べてあるのですが、かたかなを書く範囲も上の3項が基本です。

12 標準語について

標準語の教育

【問】 学校で標準語を教えても、家庭で破られるのが現場の悩みです。この点、社会教育が大いに必要です。

【答】 現場では方言環境との根比べのようなことがおありかと思
います。標準語教育として一般的なことを申し上げますと、
たとえば家庭では方言であっても、ひとたび人前に出ればりっ
ぱに全国共通の標準語で話せるように、その能力を身につけ
るように指導することがたいせつなことです。しかし、そう
かといってなにも、方言をなくすということが標準語教育で
はありません。方言の語いまたは語法でよいものは取り入れ
て、将来の標準語の育成に役だてることもたいせつなことと
思います。

馬は uma か mma か

【問】 「馬」は [uma] ですか、[mma] ですか。

【答】 「うま」というかな書きのとおりが発音しているつもり
で、その結果が [uma] になっても [mma] になっても、
あるいはその中間的なものになっても、どれも正しいと認め
る立場です。

備考：

伝統的な発音法則としては、広い母音の [a, e, o] の前
では [m] で（例 [mmareru] [mme] [mmoregi] など）、
狭い母音の [u, i] の前では [u] です（例 [umu—産む・^う倦
む・^う績む] [umi—海・^{うみ}膿] など）。それで「馬」なども、
しいて [uma] と発音せよというのはむりな点がありまし

う。さればとて「mma」だど取り立てて教える必要もない
と思われます。

「たっとい」と「とうとい」

【問】 「尊い」は、「とうとい」と「たっとい」とで、どちらが
標準的ですか。

【答】 「とうとい」は文語的（京都語系統）で、「たっとい」が
口語的（東京語系統）です。それで、当用漢字音訓表にも
「たっとい」だけがあげてあります。それで、特別に「とう
とい」と読ませたい場合には、かなで書くか、ふりがなをつ
けるかすることになります。

「感じず」と「感ぜず」

【問】 口語文で「感じず」「感ぜず」の両方を認めてよいでしょ
うか。

【答】 「感じないで」とするのが最も口語的な語法であります
が、書きことばとしては文語的な「感ぜず」を混用すること
があります。「感じず」は「感じない」と「感ぜず」との合
いの子的な語法で、東京語でいえば下町方言的な言い方
です。

「表へ出た」と「表に出た」

【問】 「雨がやんだので表へ出た。」と「表に出た。」とは、どちらが正しいでしょうか。

【答】 現代の標準的な口語としては、「表へ出た。」でよいと思います。ただし運動の動詞に続くときは一般に「に」でも「へ」でもいいのですが、「汽車に乗る。」の類は「へ」とはいいません。また、あるなしを表わすときは、「に」で「へ」を使うことはできません。「学校は山にある。」といって、「学校は山へある。」とはいいません。

「あまつさえ」

【問】 「あまつさえ」は「あまりさえ」の音便であるから「あまっさえ」というのが正しいと思いますが、どうですか。

【答】 おっしゃるとおりに、もとは「アマッサエ」と発音していたと思われますが（古い書物には「あまさへ」と書いた例があります。）、明治以来、東京語ではかなのとおりに「アマッサエ」と発音していますから、現代語としては「アマッサエ」でもよいかと思われます。

「アフル」と「アオル」

【問】 ラジオで「景気をアフル」といいましたが、あれは「アオル」ではありませんか。

【答】 「あおる」です。「アフル」は旧かなづかいで「あふる」と書いたものですから、それを文字どおりに発音したものでしょう。

注意：「水」は「アフレル」です。

「まぬがれる」と「まぬかれる」

【問】 「まぬがれる」ですか、「まぬかれる」ですか。

【答】 どちらも使ってきました。憲法の前文に、「ひとしく恐怖と欠亡から免かれ」と濁点なしに使われています。自然に「まぬかれる」のほうを標準語と見てこれにならうようになっています。

「ちょうちょう」と「ちょうちょ」

【問】 「ちょうちょう」と「ちょうちょ」は、どちらが正しいでしょうか。

【答】 もとは「ちょう」をふたつ重ねた「ちょうちょう」です

が、それを短く発音したのが「ちょうちょ」で、どちらも正しい現代の標準語として認められます。

それで、歌などを作るときには、字あしを4字にも3字にもする必要からどちらも使われます。

「欠ける」と「欠げる」

【問】 「欠ける」ですか、「欠げる」ですか。

【答】 地方によっては「欠げる——欠げた」「欠ぐ——欠いだ」というふうにも使いますが、今日、標準的な形としては「欠ける——欠けた」として文学にも使われています。

「オオグ」と「オーグ」

【問】 「仰ぐ」は〔オオグ〕ですか、〔オーグ〕ですか。

【答】 〔アオグ〕です。それで現代かなづかいでは「あおぐ」と書きます。

「オモウ」と「オモー」

【問】 「思う」は〔オモウ〕ですか、〔オモー〕ですか。

【答】 現代口語の標準的発音は〔オモウ〕だと見られています。ただし、京都語系統の発音では〔オモー〕であり、それが

謡い物などの発音に取り入れられています。

それでも普通の文語の朗読などでは〔オモウ〕でけっこうです。

「負って」と「負うて」

【問】 「責任を負って」ですか、「責任を負うて」ですか。

【答】 口語では「負って」です。

「好ましい」と「好ましい」

【問】 「好ましい」と「好ましい」とはどちらが標準ですか。

【答】 これは、平安時代の物語（竹取・源氏など）以来、どちらも行われているので、その論理的意味はだいたい同じですが、ことばとしての気持（ニュアンス——語感）が少し違うので、今日でも2語の併存を認め、たとえば「好ましからぬ結果」とか「好ましい人柄」とかのように、それぞれ適当に使い分けるよりほかはないと思います。

「かつて」と「かつて」

【問】 「かつて」と「かつて」とどちらが正しいでしょうか。わたしは「かつて」を採っていますが。

【答】 「かって」は、辞書によっては「[かつて]のなまり」とありますように、古くは万葉集にもある語で、それは「かつて」と読まれています。近世にはいって漢籍の読み方などの影響もあったらしく（そのほかに方言的発音の傾向もあったかと思われます。）、とにかく「かって」という読み方が生れました。と同時に「かつて」と読む人も多くあります。そこで現代語としての標準語としてはどちらを取るかという問題になっているのが今の段階です。

さようなわけで、さきに国語審議会の標準語部会でも問題となり、一応、「かつて」を標準の形として採るという結論になりました。（もっともこの結論は総会の決議にまではなりませんでした。）

以上のようなわけで、断定的なことは現在のところ申し上げられませんが、いずれ国語審議会でもあらためて議題となることではと思いますが、とにかく暫定的には「かつて」でいいだろうと思います。

13 敬語について

「お見えになられました」

【問】 「お見えになられました」という言い方は正しいのですか。

【答】 敬語として「お見えになりました」でじゅうぶんです。

それをいやがうえにもていねいといいまわしをしたいという
気持から「お見えになりました」という言い方がはじまっ
たのですが、そういう必要はないということが「これからの
敬語」（国語審議会建議）に指摘してあります。

14 外来語について

「ハンカチ」か「ハンケチ」か

【問】 「ハンカチ」と「ハンケチ」と、どちらを標準として教え
るべきでしょうか。

【答】 「ハンケチ」「ハンカチ」はともに明治時代の文献にあり
ますが、一般的には「ハンケチ」のほうが広く使われていま
した。今日でも話しことば（日常の会話）では多く「ハンケ
チ」のようです。ただ「ハンカチーフ」という英語の発音を
頭においてか、近く「ハンカチ」という人がふえています。

現在のところ、まだどちらを標準とするという確たる決定
はありません。教育上では、その現実をありのままに教えて
おかれたらよいと思います。

付記：荒川惣兵衛氏著「外来語辞典」によりますと、川上
眉山・小杉天外・木下尚江らの小説に「ハンケチ」とあり、

徳富蘆花・黒岩涙香などの小説・翻訳ものなどに「ハンカチ」とあります。

「あいすけえき」か「あいすけーき」か

【問】 現在、小学校では、1年からひらがなを、2年からかたかなを教えるたてまえになっていますが、1年生でも日記などを書いていると、語いとしてのアイスクーキやケーブルカーなどが出てきます。これについて次のような書き方が考えられますが、どれがよいでしょうか。

- | | | |
|---|--------|--------|
| 1 | あいすけいき | けいぶるかあ |
| 2 | あいすけえき | けえぶるかあ |
| 3 | あいすけーき | けーぶるかー |
| 4 | アイスクーキ | ケーブルカー |

要するに、1年生でひらがなを習っているものが、外来語を書くときに「ー」をどういうふうに考え、どういうふうに扱うべきかということになるのです。

【答】 1年生で日記などを書く場合に、既習のひらがなで書くのが自然で、外来語は必ず初めからかたかなで書くということ（それを1年生に適用すること）にはなっていません。問題は長音符の「ー」を使うかどうかですが、2年からのケーブルカーに移行するためには「ー」もさしつかえないと思います。それをこどもが書けば直す必要はありません。その点、

たとえば「日日」と「日々」などの例に準じて考えてもいいでしょう。かたかなの五十音図にも「ー」はないのですから。

15 くり返し符号について

「々」「ゝ」などの呼び名

【問】 くり返し符号の「々、ゝ、〈」の呼び名を教えてください。

【答】 「々」は「同」の字の1体である「仝」の草書体からきたものと考えられていますので、便宜に「同の字点」と呼ばれています。

「ゝ」は「ひとつ点」と呼ばれています。

「〈」は、その形によって「くの字点」と呼ばれています。

以上、文部省編「くりかへし符号の使ひ方(案)」にあります。

くり返し符号の使い方

【問】 くり返し符号の「々、ゝ、〈」の使用については、現在どういう方針になっているのでしょうか。教科書によってまったく使っていないのと、これまでのように使っているのとが

あってまちまちですから、お尋ねいたします。

【答】 くり返し符号は、一般に手書き時代、または手彫り時代の
ものであって、今日の活字印刷文化時代にはしだいに使われ
なくなっていく傾向にあります。

第1に「〈」が横書き・横組みには使えません。

「ㄣ」も「えㄣ」と「ええ」とで活字を拾う手間は同じで
すし、かつ「ㄣ」はくぎり符号とも紛れやすいので、これも
使用を避ける傾向です。それに「ㄣ」は五十音図にものら
ず、特別に文字として教えられるので、いっそう影が薄く
なっていきつつあります。

ただ一つ「々」だけは、今日でも活字に使われています。
これは画の多い漢字を2字重ねて書くのが煩わしい上に、活
字としてもはっきりと読み取られる形をしているからではな
いかと思われます。

以上は一般的な自然の傾向であり、その傾向はまた妥当で
はないかと考えられます。

16 そ の 他

国語改善略年表

【問】 国語改善の事業は、戦後、どんな歩みをたどってきたか、

概略を説明してください。

【答】 卷末に，（１）当用漢字・現代かなづかいを中心とするものと，（２）ローマ字教育に関するものに分けて，国語改善に関する略年表を掲げておきましたからごらんください。

第 2 部

資 料

話しことばの改善について（建議）

—— 国語審議会から昭和31年7月5日、文部大臣に
建議したものである。——

付 話しことばについて

（国語審議会第2部会長 説明）

話しことばの改善について（建議）

書きことばの研究と教育とはすでに相当に進んでいますが、話しことば（いわゆる音声言語）の研究と教育とについても、なお、いっそう改善・くふうを図る必要があると認め、次の各項を建議します。

- 1 話しことばの教育を特に学校教育において、いちだんと推進する必要がある。
- 2 「1」のためには、話しことば教育の指導者を養成する方策を、できるだけ早く立てなければならない。たとえば、とりあえず既設の大学その他の機関内に講座を置くなどの方法を講ずる。
- 3 「1」「2」のためには、話しことばの教育を科学的方法にもとづいて検討しなおす必要がある。

- 4 以上3項の対策と平行して、話しことばに関する必要な調査をいっそう根本的に、継続的に実施する必要がある。

これによって話しことばに対する社会的関心が高められることを期待します。

国語審議会は、これが実現をはかるため国立国語研究所・国立教育研究所その他の機関において具体的に研究されることを要請します。

第2部会審議経過報告

- 1 放送・演劇・映画などにおける話しことばの実情の審議と、学校教育における話合いの実際についての審議とを行い、また外国人の日本語習得の方法について、検討を行った。
- 2 その過程において、われわれは次のような実情を知り問題の所在を明らかにすることができた。
 - (1) 学校教育における話しことばの教育は、放送および録音によって進歩している一面もあるが、他の一面においては、一進一退の状態であるか、後退が見られたこと。
 - (2) 一般的には、今日なお、書きことばの偏重あるいは優先の空気があり、それが学校教育に反映しがちであること。
 - (3) 話しことばの教育について、科学的な指導・研究が普及していないため教育の現場において自信を持つことができないこと。

(4) 日本語の標準的表現(発音・発声などを含む。)については、その具体化をはかるべきであり、標準語辞典の編集普及が要望される。

3 問題は以上につぎているわけではないが、まず、話しことば教育の振興を推進しなければならないことを痛感した。

付 第2部 会長説明

書きことばの観察や研究には文字という確かな手がかりがあるが、話しことばにはそれにあたるものが以前は全くなかった。

近來は録音があるが、その自然のものを広い範囲にわたって採集することは容易なことではない。

話しことばの実践は場面によつていて、音声の上にあられるのはまず半分といつてよいであろう。そこで生きたことばの全体をみる資料としては録音映画が考えられるが、それも實際の話しことばの生の姿を記録することはきわめて困難である。

さらに共同の審議には、一定の日時に会合して同じものを見たり聞いたりしなければならないという条件がある。

以上のような幾重もの制約があるので、話しことばの審議はひじょうにむずかしい。さいわいに各方面の理解と好意ある協力によって、できるだけ広く種々の資料について観察するように努力した。ここに報告するところは、その間に表明された希望や感想などを部類わけに集めたものである。

話しことばについて

- 1 話しことばについて
- 2 話しことばの教育
- 3 特に話合いの教育について
- 4 書きことばとの交渉
- 5 放送のことば
- 6 映画・演劇などのことば
- 7 敬語について
- 8 話しことばと生活

1 話しことばについて

話しことばにはいろいろな面があり、わたしたちも審議の対象をできるだけ広くと努力したが、けっきょく、その中心は「いつ、どこで、だれが、だれと話し合ってもよいことば」ということに限定された。

一家庭や一町村で使うことば、あるいは一定の職場などで作業上最も能率的に使うことばづかいは、それぞれのところで生きて

はたらいっている話しことばであるが、その使われる範囲が狭い。ここでいう話しことばは、そうした限られた範囲でなくて、それこそ広く、いつ、どこで、だれが、だれと話し合ってもよいことばである。したがって、たとえば、ラジオの全国中継で話をする場合にも使われることばづかいである。

さらにいえば、すべての人が社会人（公人）としてものをいうときのことばづかいである。

以上のような意味での話しことばは、決して自然に〔放任状態で〕習得されるものではなく、ある程度の教育と修養とによって身につけられるものであり、あたかも書きことばにおける習字（筆順・筆法・書式などを含む。）や作文の学習と同じ性質のものである。したがって、これからの国民がひとり残らず、だれでもが自由に使って相互の意志を正確に通じ合うことができるようになるためには、よほどの覚悟と努力とがいとえられらる。

2 話しことばの教育

1

書きことばは、児童・少年期にはいつてから習ったものであるので、おとなになってからでも努力によって、よくすることができるが、話しことばの基礎は乳のみ子の時代から無意識のうちに覚え込んでいるものなので、特に発音・発声などは、おとなになってから意識的に努力してもなかなかほねのおれるものである。その点で世のおかあさんがたが、こどものことばの教育について

いっそう深く考えてくださることが望ましい。

幼稚園で使われることばに、たとえば「帰りましょう」を「お帰りしましょう」とか「絵をかきましょう」を「お絵かきしましょう」というふうな言い方があり、その改善についてはすでに一部では有益な研究が行われているが、幼稚園教育のきわめてたいせつであることにかんがみて、なお全国的に研究を進められたい。

幼児のことばに大きな影響を与えるものに童謡がある。その歌詞にこどものことばへの思い過ごしと思われるものがある。

こどもを対象とする放送で、こどもに同化するというよりも、むしろこども以上のこどもことば、あるいは一種の迎合の調子などがありはしないか。

2

話しことばのたいせつなことが考えられて、小学校の国語科の課程に「話し方」が置かれたのは 60 年前（明治 33 年）であるが、さらに戦前（昭和 16 年）から戦後にかけての「話し方」ないし「話しことば」の教育の強化によって、今日ではその具体的な指導方針も立てられている。たとえば低学年から、たやすく仲間にはいって友好的な態度で話すことができるように、また、しだいになまりのない発音で、方言を使わないで話すことができるようにということなど。

ことばの指導が、それらの目標に近く達せられるためには、なによりも教師のことばがたいせつである。教室の時間は短いが、こどもに及ぼす影響は大きい。

他教科の教師は、その教科の内容を伝えることに注意を集中するあまり、一般的にことばに対する関心が薄い傾向がある。すべての教師は、一面、国語の教師としての任務があることを自覚してほしい。

学校教育における、いわゆる標準語（普通語）と方言との関係が話題になったが、およそ国語教育は、いわゆる標準語（普通語）で標準語（普通語）を教育するというのがたてまえである。

作文で、地の文は標準語（普通語）で書き、会話の部分は方言で書くというのは、一種の文学的または社会科的な行き方としてはじゅうぶんに教育的意義がある。それと同時に、もし作文を話しことばの訓練の1方法として課する場合には、むしろ会話の部分こそ標準語（普通語）で書き、それに自由な感動・思考を盛ることに苦心と努力とを積ませるところに教育的意義があるといえよう。

3

書きことばには教科書その他の教材が豊富にあるが、話しことばにはそれにあたるものが少ない。これからその充実に努力する必要がある。

近来、録音機の普及によって、それが学校教育からひいて社会教育にまで利用されているが、さらに教科書などに出ている話のやりとりや、日常生活の模範的なもの、または音読などのレコードが多く作られ、かつ、それらを通じての録音ライブラリーがいっそう盛んに利用されることが望ましい。そして、良い音声なり

良いことばなりを、ふだん多く耳に聞き慣れることがたいせつである。

発音・発声の訓練には、自分の声なりことばなりを客観的に聞いてみるものが第1着手の仕事である。

なお発音・発声に関する診断・治療の設備を普及したい。

4

はっきりとものをいうためには、自己の良心に従って正しいことをいう勇気がいるが、それを力づけるものは発音・発声やことばづかいに対する技術的な自信である。

戦後、理解の面から黙読が奨励され、それにはそれとしての理由があるが、その半面、表現の面における音読の利益と効果とを忘れてはならない。ただし、それは、戦前の朗読の単なる復活ではなくて、話しことばの訓練の一環としての新しい作業でなくてはならない。その上で芸術的な朗読にまで進むことはおのずから別個の問題である。

教科書中の対話の部分や学校側の本読みなどが、この目的のために大いに役だつであろう。ただし、映画や劇中のせりふまわしをまね過ぎたり、あるいは、そのままを実生活面に移すことなどは大きな誤りであることを注意したい。

3 特に話合いの教育について

1

話しことばは聞きながら話す——すなわち、話合いのことばで

ある。したがって、聞くことを離れてはなりたない。その点において、すでに教育上の指導目標も立てられている。たとえば、低学年から、かわるがわる聞いたり話したりすることができるように、また相手の意見を尊重して聞くことができ、他人の意見を尊重して話すことができるような態度を養うことなど。

このような指導目標で早くから育てられた次代の国民によって、やがて広く社会一般に、りっぱな話合いの運営が営まれるようになるであろう。

今日のおとなたちは、ほとんど話合いや会議のしかたについての教育を受けなかったが、次代の国民には、ぜひとも高い程度の話合いや会議のしかたの教育を受けさせたいと痛感する。

2

幼稚園・小学校・中学校におけるいろいろな場面の話合いと、それに国語と理科との学習状況の録音を聞いたが、一般に語尾をはっきりと発音して、肯定・否定の判断その他の意志と態度とを明らかにするように心がけること、および「エー」「アノー」など、さまざまな間投語が多くはいることに気づかせたい。文章の字面は同じでも、それを音声に乗せたときには変わってくることが多いので、ことばの言いまわし（調子）に配慮することなどを注意したい。

3

青年・学生たちの討論会では、一般に以前よりはよほど態度も

落ち着き、ことばづかいも良くなっている（たとえば演説口調がない。努めてやさしいことばを使おうとしている、など）。が、それでも少し討論が進むと興奮する例が多い。話合いの根本は心の平静にあり、討論の「討」は「真理を尋ね究める」意味だといわれている。話合いは、違った意見を持ち寄って、そこに総合的な新しい考えを得ようとする共同目的のもとに営まれるものであることを、まず参加者のすべてが心から了解することが必要である。

4 書きことばとの交渉

1

話しことばは聞いてわかることばでなければならない。新しいことばを造るときに、これまでは主として漢字の字面の良い悪いにたよっていたが、これからは次のような点にも注意したい。

- (1) それを発音してみて、口に言いにくいことはないか。
- (2) 耳に聞いてすぐにわかるか、またはわかりやすいか。
- (3) 同じ音(またはごく近い似た音)のことばが他にないか。
- (4) 音の感じが悪くないか。
- (5) 悪い連想を起させないか。
- (6) それが書きことばと話しことばとに共通に使えるか。

このような小さな反省と注意とが積み積って、知らず知らずの間に、やがてだれにもわかることばが生れかつ成長すれば幸である。

2

たとえば「白^そ鼠」「家^と兎」とか「中耕」「分^{けつ}蘖」など、一部の専門家あるいは限られた職場の中ではわかっていても、それが一般にわかることばでないもの、またはむずかしい漢字は、なるべく漸次に改められたい。すでに法令用語・学術用語・新聞用語・放送用語などでは着々その事業が進められている。

なお略語のことを研究する必要がある。

3

話しことばと書きことばとは、おのおの独自の分野に立っているが、しかも互に影響し合って進歩していくものであるから、書きことばをよくするためには話しことばを向上させ、話しことばをわかりやすくするためには書きことばをわかりやすくすることに努めなければならない。

ラジオのニュースでも、まず原稿を書いているのである。その点、話すようにと書く担当者の努力に対して敬意を表するとともに、さらに文学者の創造的活動に期待するところが大きい。

4

いろいろな講演や放送などで、その用語がだんだんやさしくなっていくことは認められるが、それでもまだ漢語が多く、一度、頭の中で漢字を書いてみなければならないことばが少なくない。その理由の一つに、漢字の性質上、漢語に同音語が多いということがある。（注 参照）。が、それらもすでに改善の道が開かれて

いる。たとえば、法令用語で「規定」と同音語の「規程」を「規則」とし、あるいは「干渉」に対する「管掌」を「つかさどる」とするというふうに。

〔注〕 たとえば当用漢字 1850 字のうち音の種類は 289 で平均 1 音に 6.4 字ある計算であるが、実際には次のような分布である。

「コウ」の同音字 60 字 「ショウ」の同音字 59 字

「シ」の同音字 46 字 「カン」の同音字 44 字

「トウ」の同音字 36 字 「キ」の同音字 35 字

「セイ」「ソウ」の同音字各 30 字

そ の 他 :

29 字から 20 字までの同音字をもっている音の種類が 19,

19 字から 10 字までの同音字をもっている音の種類が 33,

9 字から 2 字までの同音字をもっている音の種類が 172,

そして、1 音で 1 字のものはわずかに 57 に過ぎない。

和語では、たとえば「橋・箸・端^{はし}」という同音語に対しても、これまでは一応アクセントによって区別してきたが、漢語では、たとえば「高度・光度・硬度」などのように、たいていアクセントも同じであるから、いっそう聞いただけではわからないことが多いわけである。

5 放送のことば

1

よい発音を身につける基礎はふだんよい発音を聞いて耳にたく

わえることによって築かれる。ラジオの全国中継アナウンスの発音が一種の模範的発音であるということはすでに一般に認められているところであるが、それだけに担当アナウンサーの任務は重大である。

2

放送用語の改善については、これまでもっぱら放送当事者の間だけで努力が払われてきたが、これからは一般出演者の自覚と努力とによって、すべての放送がことばに関するかぎりよい話しことばでありたい。

3

駅・劇場・デパートなどの案内アナウンスや街頭の宣伝アナウンス、その他、観光バスの案内などに、これからその純化と美化とに努力していくべき面がある。

6 映画・演劇などのことば

1

実際に映画を見たり、あるいは各社の代表的な作品のシナリオについて研究してみた結果、そこには特にことばの上で優秀な作品のあることも見いだしたが、一般に、そうした作品を推奨する制度がほしいということ、および、それと同じ趣旨で、音声的表現にすぐれた俳優その他の専門家を、批評家の協力によって推奨する方法はないものか。

字幕のことばと用字法とが、大衆のことばの教育の一翼を荷な

っているので、その点に注意して研究を進めてほしい。

外国映画のスーパーインポーズにおける不熟な翻訳口調が問題である。それが実際の話しことばに与える影響の小さくないことを考えて、その方面の努力を希望する。

演劇のプログラムや解説などの中に、語句の注釈を加えるなどして、ことばに対する一般の興味を呼び起すような方法はどうかということなども話題にのぼった。

2

大衆芸能のことばについて2種の放送録音を聞いてみたが、なによりもその「ことばがよくわかる」という長所を生かして、新しい良いものを生み出す方向に批評家の協力が望まれる。

3

学校劇や紙しばいなどを、ことばの立場から研究してみる必要がある。

7 敬語について

1

敬称の「さん」の使用を普及徹底させたい。

2

ある中学3年の教室の例で、敬語の使い方を対訳法で練習している問題について実験してみたが、こどもにとってもおとなにとっても、その場合場合に応じて適切な表現をすることはなかなかむずかしいものであることがよくわかった。

3

若い世代は、ことばの上では同じ形式であっても、その気持には敬語の意識があり、それが態度や調子で表わされるのではないか。

ある会社の面接で「ぼく」といって不合格になったという話があるが、これはおそらく、態度その他の点をも総合された結果であって、単にことばだけの問題ではなかったのであろう。もし単にことばだけの問題であったならば、入社してからでも、注意を与えれば容易に直るはずのものである。

放送録音でも、ある表彰を受けた人に対しての「こんど表彰されたのですが……」は敬語の足りない例であり、逆に行き過ぎの例としては「参加されることを希望されたいかたは……」などがあつた。

人にものを問われて、まじめに「御存知ありません。」と答えたり、あるいは、だれのことでも「おっしゃる」とか「申す」とかといえば敬語になると考えたりしている若い世代が少なくないのに対して、当面、適切な敬語の使い方を指導するとともに、いわゆる敬語法（待遇法）そのものの簡素化ということについて、これからも絶えず研究していかなければならないと考える。

8 話しことばと生活

話しことばといえは、すぐにおしゃべりのことかと思う人もあるが、決してそうではない。また話術でもない。それは日常の実

生活に即したものである。

たとえば「〇〇さん、郵便！」といっても、昔は返事があったが、今はない。立つより先に返事である。これは 30 年勤続者として表彰されたある郵便配達員の話の1節であったが(放送録音)、そのさい返事は単なる音声ではなくて行為なのである。それがほんとうのことばであり、生きた話しことばである。

国語教育におけるローマ字教育 について（報告）

—— 国語審議会から 昭和 31 年 7 月 5 日

文部大臣あて報告したものである ——

国語教育におけるローマ字教育について

現在行われているローマ字教育は、昭和 21 年に設けられたローマ字教育協議会から提出された「ローマ教育を行ふについての意見」を参考として決定された「国民学校におけるローマ字教育実施要項」に基いて始められ、その後は「学習指導要領一般編」および「小学校学習指導要領国語科編」「中学校
高等学校学習指導要領国語科編」に基いて実施されている。

ローマ字調査分科審議会は、このローマ字教育の趣旨・目的、ならびに国語教育におけるローマ字教育の価値が教育の現場において、じゅうぶんに理解されることが必要であると認め、それについて審議した結果、今日までに次のような考えに到達している。

国語教育の目的の一つは、的確に表現し、的確に理解する力をつけることにある。すなわち、事実を正しくつかみ、それを効果的に正しく表現し、また、理解する力を養うことにあるといえよ

う。この表現と理解のささえをなすものの一つは、ことばのきまりやはたらきについての知識である。

小学校の国語教育における文法的内容についての学習指導は、具体的な言語生活を通して、いわゆる文法的事実を意識させること、すなわち、まず語意識の発達に努めるべきであり、これがためには、学習活動の場において、ローマ字文を利用することが望ましい。なぜなら、ローマ字文のわかち書きは、ことばのきまりやはたらきを直接児童・生徒の目に写すからである。また、ローマ字を使うことによって、国語の法則・性質・構造などについて、児童・生徒にそれらの事実をたやすく理解させることができ、さらに発音教育にも効果があると認められるからである。

以上の見地からみて、国語教育の一環としてのローマ字教育を現行の時間数の範囲内で実質的に充実して行うことは、国語教育の効果をいっそう高めるのに適切なことであると認める。

なお、これに伴い、ローマ字文のわかち書きのしかたについて再検討を加えること、学習効果を高めるために、算数・社会・理科などの方面においてもローマ字を利用すること、およびローマ字教育の実効を上げるための教師の養成問題などを考慮する必要がある。

国語改善に関する略年表

(1) 当用漢字表・現代かなづかい関係

- 明治 4. 7. 18 ○ 文部省設置。7. 28 文部卿大木喬任。
9. 18 ○ 編輯寮を置いた。
- 明治 5. 3. 一 ○ 文部省編「単語編」3冊発行。同書およびその他の教科用図書において、歴史的かなづかいを採用した。
- 明治 5. 7. 一 ○ 大木文部卿の発意により、国民常用の漢字を選定せしめ、3167字の「新撰字書」が成稿した。
- 明治 11. — ○ 千葉県師範学校において、校長那珂通世の発意により、教科書を表音的かなづかいに書きかえて教授した。
- 明治 13. — ○ 文部省編輯局「送仮名写法」を定めた。
- 明治 22. 4. 一 ○ 官報局「送仮名法」発表。後、明治 27 年に増補版発行。
- 明治 26. — ○ 文部大臣井上毅、字音かなづかいの改定を企図し、その是非について文科大学および第一高等学校の諸教授に意見を求めた。
- 明治 33. 2. 一 ○ 貴・衆両院において、国字国語国文の改良に

関する建議案が可決され、それに関する調査会
を設けることになった。

文部省で同年4月国語調査委員長（前島 密）
および委員（6名）を囑託した。

明治 33. 8. 21 ○ 小学校令施行規則において、尋常小学校（当
時4年制）において教授に用いる漢字は、なる
べくその第3号表に掲げる文字の範囲において
選ぶべしと規定した。その漢字の数は1200字
である。

○ 小学校令施行規則（第2号表）において字音
かなづかいを改定した。これがいわゆる「ぼう
引きかなづかい」である。

備考：国語かなづかいはもとのままにした。

○ 小学校令施行規則（等1号表）において、か
なの字体を統一した。いわゆる変体かなを廃止
した。

明治 35. 3. 24 ○ 国語調査委員会官制が公布された。4. 11 委
員長加藤弘之、委員12名が任命された。

明治 35. 7. 4 ○ 国語調査委員会が、その調査方針および応急
の調査事項を決議して公表した。

明治 35～36 年 ○ 文部省外国地名人名の称え方書き方を調査・
発表した。

明治 37. 4. 1 ○ 国語調査委員会「片仮名・平仮名 読ミ書キ

ノ難易ニ関スル実験報告」発行。

これは松本亦太郎・元良勇次郎に依嘱した研究
の報告である。

明治 38. 3. — ○ 文部省図書課「仮名遣試験成績表」発表。

明治 38. 2. 27 ○ 「国語仮名遣改定案」「字音仮名遣ニ関スル
事項」（教科書調査委員会が作成したもの）お
よび文部省図書課で作成した国語仮名遣改定別
案を、国語調査委員会・高等教育会議・各府県
師範学校・帝国教育会に諮問した。

明治 39. 3. — ○ 文部省図書課から「句読^{とう}法案」「分別書キ方
案」を発表した。

明治 40. 3. 20 ○ 国語調査委員会「送仮名法」発行。

明治 41. 5. — ○ 文部省図書課「新仮名遣国語表案」発表。

明治 41. 5. 23 ○ 臨時仮名遣調査委員会官制公布。同会へ文部
大臣から仮名遣改定案を諮問した。

明治 41. 9. 7 ○ 同上の諮問案を撤回し、小学校令施行規則を
改めて、さき（明治 33 年）の「ぼう引きかな
づかい」を廃止した。

明治 41. 12. 12 ○ 臨時仮名遣調査委員会官制廃止。

大正 1. 9. — ○ 国語調査委員会「疑問仮名遣前編」発行。

大正 2. 6. 13 ○ 国語調査委員会官制廃止（行政整理のため）。

大正 5. 6. 14 ○ 文部省普通学務局に国語調査室を設け、国語
調査に関する事業を所管した。

大正 8. 4. — ○ 文部省の公用文を口語体に改める。

同年7月29日、はじめて口語体の訓令が文部省から出た。さらに9年、10年に「口語文用例集」それぞれ1冊を発行した。

大正 8. 12. — ○ 文部省普通学務局「漢字整理案」発表。

これは字体の整理案である。

大正 10. 6. 24 ○ 臨時国語調査会官制公布。会長 森林太郎、
委員 34 名。

大正 12. 5. 9 ○ 臨時国語調査会「常用漢字表」(1962 字) 発表。

大正 13. 12. 24 ○ 臨時国語調査会「仮名遣改定案」(字音・国語とも) 発表。

大正 14. 11. — ○ 臨時国語調査会「字体整理案」発表。

大正 15. 5. 12 ○ 臨時国語調査会「当字の廃棄と外国語の写し方」発表。

大正 15. 6. 1 ○ 内閣訓令「法令形式ノ改善ニ関スル件」公布。
(若槻内閣)

大正 15. 7. 7 ○ 臨時国語調査会「字体整理案」発表。

○ 臨時国語調査会「漢語整理案ソノ一」発表。

昭和3年12月「同ソノ十三ノ二」まで逐次発表した。

昭和 6. 1. 31 ○ 内閣訓令・告示をもって、「資源ニ関スル標準用語ノ使用普及ニ関スル件」および「資源ニ

関スル標準用語中薬品ニ関スルモノ」発表。その後、「機械ニ関スルモノ」、「電気ニ関スルモノ」等が逐次に発表された。

昭和 6. 6. 3 ○ 臨時国語調査会「常用漢字表」(1858字)発表。

これは大正 12 年の「常用漢字表」を修正したものである。

○ 臨時国語調査会「仮名遣改定案」発表。

これは大正 13 年の「仮名遣改定案」を修正したものである。

昭和 9. 3. 19 ○ 臨時国語調査会から国号「日本」の呼称統一案を発表した。

昭和 9. 12. 21 ○ 国語審議会官制公布。会長南弘，副会長穂積重遠。委員 35 名。臨時国語調査会官制廃止。

昭和 13. 7. 14 ○ 国語審議会「漢字字体整理案」議決答申。

昭和 17. 4. 一 ○ 文部省に「外国地名人名ノ呼称並ニ表記ニ関スル協議会」設置。

昭和 17. 6. 17 ○ 国語審議会「標準漢字表」議決答申。内訳：常用漢字 1134 字，準常用漢字 1320 字，特別漢字 74 字，計 2528 字。

備考：特別漢字とは古典的漢字（詔勅専用漢字を含む。）である。

昭和 17. 7. 17 ○ 国語審議会「新字音仮名遣表」議決答申。

昭和 17. 12. 一 ○ 文部省「標準漢字表」(2669 字)発表。

これは文部省が独自の立場から選定したもので、
国語審議会の「標準漢字表」にある常用・準常用
・特別の区別がない。

昭和 19. 9. — ○ 外国地名人名協議会から「外国地名人名整理
案」「同表記法案」を議決答申した。

昭和 20. 8. 15 (終戦)

昭和 21. 3. — ○ 国語調査室「送りがなのつけ方(案)」「くり
かへし符号の使ひ方(案)」「くぎり符号の使ひ
方(案)」「外国地名人名の書き方(案)」の諸案
を発表した。

昭和 21. 4. 17 ○ 憲法改正草案(口語体)が内閣から発表され
た。

昭和 21. 4. 18 ○ 「各官庁における文書文体等に関する件」(法
制局)が次官会議で決定した。

昭和 21. 6. 17 ○ 「官庁用語を平易にする標準に関する件」の
実行を次官会議で申し合わせた。

昭和 21. 9. 21 ○ 国語審議会第 11 回総会。
「現代かなづかい」議決答申。

現代かなづかいは、現代語をかなで書き表わす
場合の準則を示したもので、主として現代文のう
ち口語体のものに適用するものである。

昭和 21. 11. 3 ○ 「日本国憲法」公布。

昭和 21. 11. 5 ○ 国語審議会第 12 回総会。

「当用漢字表」(1850 字) 議決答申。

当用漢字表(1850字)は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で使用する漢字の範囲を示したものである。

昭和 21. 11. 16 ○ 「当用漢字表」および「現代かなづかい」が内閣訓令・告示で公布された。

昭和 21. 12. 24 ○ 「公文用語の手びき」が「官庁の用字用語をやさしくする件」として、内閣から各省庁に達された(閣甲第 418 号)。

昭和 22. 9. 29 ○ 国語審議会第 13 回総会。

「当用漢字音訓表」議決答申。

「当用漢字別表」議決答申。

「当用漢字別表」とは、いわゆる教育漢字(881 字)であって、当用漢字 1850 字のうち、義務教育 9 年の間に、読み書きともにできるように指導することが必要であると認められたものである。

「当用漢字音訓表」は、当用漢字の各字について、今後、使用する音訓を示したものである。

昭和 22. 10. 1 ○ さる 7 月に文部省に設けた活字字体整理に関する協議会が「活字字体整理案」を議決、10 月 5 日、国語審議会に送付してその審議を求めた。

昭和 23. 2. 16 ○ 「当用漢字音訓表」および「当用漢字別表」が内閣訓令・告示で公布された。

昭和 23. 6. 1 ○ 国語審議会第 14 回総会。

「当用漢字字体表」議決答申。

昭和 23. 6. 11 ○ 「公用文改善協議会設置について」および
「公用文改善協議会の調査審議事項の実施について」が、閣議の決定および了解となった。

昭和 23. 6. 21 ○ 「改編公文用語の手びき」が「官庁の用字用語をやさしくすることについて」として、総理庁から各省庁に通達された（閣甲第 255 号）。

昭和 23. 12. 20 ○ 国立国語研究所設置法公布（法律第254号）。

昭和 24. 3. 16 ○ 公用文改善協議会から「公用文改善協議会報告」が内閣総理大臣に報告された。

昭和 24. 4. 5 ○ 「公用文改善協議会報告第1部公用文の改善」が、内閣官房長官から各省大臣あて依命通達された（閣甲第 104 号）。

昭和 24. 4. 28 ○ 「当用漢字字体表」が内閣訓令・告示で公布された。

昭和 24. 7. 5 ○ 文部省設置法に基づく国語審議会令（政令第253号）による国語審議会が設けられた。

昭和 24. 9. 1 ○ 文部省では、「文部省文書処理規程」に基づいて、すべての公文書に左横書きを実施した。

昭和 24. 7. 30 ○ 国語審議会第 17 回総会。「中国地名・人名の書き方の表」を議決、文部大臣に建議した（8. 1 付）。

昭和 25, 3. 14 ○ 文部省の「公文書の書式」を定めた。

昭和 25, 4. 17 ○ 国語審議会・ローマ字調査審議会を合併して、新たに政令第 85 号による国語審議会が設置された。この国語審議会の中にローマ字調査分科審議会が設置された。

昭和 25. 6. 12 ○ 国語審議会第 7 回総会。「国語問題要領」(国語白書) を議決。文部大臣に報告した。

これは、国語の現状を分析して国語問題の所在を尋ね、かつ、改組後の新しい国語審議会が自らの性格と任務および今後の審議方針を明らかにしたものである。

その全文は国語シリーズ 26 「国語問題問答第 3 集」にのせてある。

昭和 25. 10. 30 ○ 国語審議会第 8 回総会。

「法令の用語用字の改善について」を議決。文部大臣・法務総裁に建議した(昭和 25. 11. 7 付)。

これは、法令用語の平易化および統一のため。法務府が中心となり、審議機関を設けるなど適当な方法で調査研究することを希望して建議したもので、その際問題となるべき事項を列举したものである。

昭和 25. 12. 一 ○ 「文部省刊行物表記の基準」発行。

昭和 26, 5. 14 ○ 国語審議会第 11 回総会。「人名用漢字別表」議決。同日、法務総裁・文部大臣に建議した。

これは、昭和 22 年 12 月 22 日公布の戸籍法第 50 条に「子の名には、常用平易な文字を用いなければならない。常用平易な文字の範囲は命令でこれを定める。」とし、同施行規則第 60 条で常用平易な文字は当用漢字表に掲げる漢字および片かなまたは平がなと定められた。ところが、この立法の趣旨がじゅうぶんに社会に徹底せず、不便を訴え、人名用漢字の制限緩和を要求する声があったので、国語審議会はこの問題を取り上げ、92 字の「人名用漢字別表」として議決・建議したものである。

昭和 26. 5. 25 ○ 「人名用漢字別表」が内閣訓令・告示で公布され、同日戸籍法施行規則の一部を改正して、こどもの名の漢字に上の 92 字を加えた。

以上の経過の詳細については、国語シリーズ 5「名まえとその文字」を参照。

昭和 26. 10. 23 ○ 国語審議会第 12 回総会。「公用文作成の要領」を議決、これを「公用文改善の趣旨徹底について」として、内閣総理大臣・文部大臣に建議し、また「公用文の左横書きについて」を議決、内閣総理大臣に建議した（昭和 26. 10. 30 付）。

昭和 27. 4. 4 ○ 「公用文作成の要領」が、内閣官房長官から各省事務次官あて依命通知された（内閣閣甲第

16 号)。

「公用文作成の要領」は、国語シリーズ21「公用文の書き方資料集」にある。

昭和 27. 4. 14 ○ 国語審議会第 14 回総会。「これからの敬語」を議決、文部大臣に建議した。

これは、「その行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素な形にする」という方針のもとにまとめられたものである。

「これからの敬語」の本文は 国語シリーズ 26 「国語問題問答第 3 集」にある。

昭和 27. 12. 18 ○ 国語審議会第 17 回総会。

学術奨励審議会学術用語分科審議会からの質問「学術用語の表記について」に対する回答「学術用語の表記について」を決定、回答した。

これは、学術奨励審議会学術用語分科審議会から国語審議会へ次の要旨の質問があったのに対する回答である。

質問 1 外国語・外来語の表記について。

質問 2 英語語尾の長音符号について。

質問 3 術語のかな書きと送りがなについて。

以上、回答の全文は「国語審議会報告書」（昭和 27 年 4 月～ 29 年 4 月）参照。

昭和 28. 10. 8 ○ 国語審議会第 19 回総会。

「町村の合併によって新しくつけられる地名の

書き表わし方について」議決。内閣総理大臣に建議した。

これは、政府の市町村合併促進事業に伴い、新しく地名が作られるにあたって、なるべくわかりやすい文字と読み方とを用いるようにしてほしいという趣旨であり、この建議は、その後、総理府から自治庁に回付され、同庁により趣旨徹底方が取りはからわれた。

建議の全文は「国語審議会報告書（昭和 27 年 4 月～29 年 4 月）にある。

昭和 29. 3. 15 ○ 国語審議会第 20 回総会。

漢字部会から報告された「『当用漢字表審議報告』について」を発表。

これは、当用漢字表の補正について審議したもので、普通に「当用漢字表補正案」といわれているものである。

国語審議会は、これを「将来当用漢字表の補正を決定する際の基本的な資料となるもの」という意見を付して公表した。したがって現在の当用漢字表の内容や、法令および教育の上での取扱には関係のないものである。

この報告および声明書の全文は、国語シリーズ 26「国語問題問答第 3 集」にある。

○ 「法令用語改正例」を別冊とする「法令用語

改善について」を議決、内閣総理大臣に建議した。

これは、昭和 29 年 11 月 25 日、法制局の検討を経て、その一部が「法令用語改正要領」として決定された。

○「標準語のために」が標準語部会から報告があり、総会としては、これを国語審議会今後の審議上の参考資料とすることとした。

○「外来語の表記について」の原則および語例が、術語・表記合同部会から報告された。

総会としての議決にはならなかったが、「この趣旨が広く社会に普及し、一般に実行されることが望ましい」として、国語審議会から発表された。その全文は 国語シリーズ 27「外来語の表記資料集」にある。

昭和 29. 11. 1 ○ 国語審議会第 23 回総会。国語審議会に第 1 部会（書きことば部会）第 2 部会（話しことば部会）を設置。

昭和 29. 11. 25 ○ 法制局「法令用語改正要領」が、内閣法制局次長から各省庁へ配付された（法制局総発第 89 号）。

これは、昭和 29. 3. 15 国語審議会から建議された「法令用語改正例」に基くものである。同要

領の全文は 国語シリーズ 25「法令用語の改正」にある。

昭和 30. 7. 12 ○ 国語審議会第 28 回総会。「かなの教え方について」を議決、文部大臣に報告した。

これは、中央教育審議会から「小学校児童にひらがなから教えることについては、現場の教育者および学者、一般社会人の間にも相当異論があるから」「その取扱を慎重に研究せられたい」という趣旨の答申があり文部大臣から国語審議会へ付議されたので、その審議の結果を報告したものである。

参考：この問題について、別に教育課程審議会からも答申があった。

以上については 国語シリーズ 29「国語問題問答第 4 集」参照。

昭和 31. 7. 5 ○ 国語審議会第 32 回総会。

「話しことばの改善について」を議決、文部大臣に建議した。

これは、書きことばの研究と教育とはすでに相当に進んでいるが、話しことば（いわゆる音声言語）の研究と教育とについても、なお、いっそうの改善・くふうを図る必要があると認めて、4 項目の要望を建議したものである。

その建議の全文と部会の審議経過報告は本集お

よび「国語審議会報告書3」にある。

○「正書法について」を議決、文部大臣に報告した。

これは、当用漢字表・現代かなづかいが制定されて10年を経た今日、国語の表記に関する問題のいっさいを正書法という立場から見わたして、これまで個別的に行われてきた仕事の総まとめ、ないしは体系づけを考えてみるべき段階に至ったとして、その観点から現代かなづかいにおける適用上の問題点を検討したものである。

その全文は「国語審議会報告書3」および国語シリーズ35「現代かなづかいと正書法」にある。

○「同音の漢字による書きかえ」を議決、文部大臣に報告した。

これは、当用漢字表にない漢字を含む熟語で、これまで広く使われていたものを整理する一つの方法としての「同音の漢字による書きかえ」について審議し、書きかえの具体例を決めたものである。その全文は「国語審議会報告書3」および国語シリーズ35「現代かなづかいと正書法」にある。

(2) ローマ字教育関係

明治 33.11. 5 ○ 文部省から、「羅馬字書方調査報告」が発表された。

文部省が上田万年、ほか 10 名に依頼して、国語を書き表わす場合のつづり方・わかち書きなどについて調査した結果の報告で、「文字ノ呼ヒ方及順序」「各音ノ記シ方」「符号ノ用法」「語ノ分別書方」などに分けてそれぞれきめてある。そのうち、つづり方は次のとおりである。

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ci	tsu	te	to	ca	cu	co
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	fu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	i	yu	ye	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	i	u	e	o			
				(wo)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	ji	zu	ze	zo	ja	ju	jo
da	ji	zu	de	do	ja	ju	jo
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

語 例：(特別の書き方をするものを要約して掲げた。)

つき合い (tsukiyai), 三重県 (Miyeken),
埋合せ (umeyawase), どんぐり (dongri), ドク
トル (doktoru), 私 (wataksi), 帝国 (Tēkoku)

明治 35. 7. 4 ○ 国語調査委員会がその調査方針として、「文
字ハ音韻文字（「フオノグラム」）ヲ採用スルコ
ト、シ仮名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト」ほ
か3項を決議したと発表された。

昭和 5. 11. 25 ○ 臨時ローマ字調査会官制が公布された。（勅
令第 222 号）

臨時ローマ字調査会は、昭和 5. 12. 15 から昭
和 11. 6. 26 までに 14 回の総会と、3次（計
25回）にわたる主査委員会を開いて、次のように
ローマ字のつづり方を決定した。

a	i	u	e	o	
ka	ki	ku	ke	ko	kya kyu kyo
sa	si	su	se	so	sya syu syo
ta	ti	tu	te	to	tya tyu tyo
na	ni	nu	ne	no	nya nyu nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya hyu hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya myu myo
ya	i	yu	e	yo	
ra	ri	ru	re	ro	rya ryu ryo
wa	i	u	e	o	

ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	di	du	de	do	zya	zyu	zyo
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

備考：(1) 撥音ハスベテ n デアラハスコト
(2) 必要ノアル場合ニハ si, ti, tu, tya, tyu, tyo ヲ $\check{s}i, \check{t}i, \check{t}u, \check{t}ya, \check{t}yu, \check{t}yo$ ノ如ク記スコトヲ得

昭和 11. 6.30 ○ 臨時ローマ字調査会官制が廃止された。(勅令第 144 号)

昭和 12. 9.21 ○ 内閣訓令第 3 号で、ローマ字のつづり方が公布された。

内閣訓令第 3 号

各 官 庁

国語ノローマ字綴方ハ従来区々ニシテ、其ノ統一ヲ欠キ使用上不便尠カラズ、之ヲ統一スルコトハ教育上、學術上、將又國際關係其ノ他ヨリ見テ、極メテ必要ナルコトト信ズ。仍テ自今左ノ通ローマ字綴方ヲ統一セントス。各官庁ニ於テハ漸次之ガ実行ヲ期スベシ。

昭和 12 年 9 月 21 日

内閣総理大臣 公爵 近 衛 文 麿

(つづり方の表は省略)

昭和 20. 9. 3 ○ 連合国最高司令部から、都会などの名を道路・
停車場などに英語で掲げるよう指令が出た。

(指令第 2 号, A B O 500)

日本国政府ハ一切ノ都会自治町村及市ノ名称ガ
此等ヲ連結スル公路ノ各入口ノ両側及停車場歩廊
ニ少クトモ六「インチ」以上ノ文字ヲ使用シ英語
ヲ以テ掲ゲラルルコトヲ確保スルモノトス 名称
ノ英語ヘノ転記ハ修正「ヘボン」式（「ローマ」
字）ニ依ルベシ

昭和 21. 3. 31 ○ 日本を訪れたアメリカの第 1 次教育使節団か
ら、報告書が連合国最高司令官に提出された。

「国語の改革」についての提案の要旨は次のと
おりである。

- 1 ある形のローマ字をぜひとも一般に採用すること。
- 2 選ぶべき特殊の形のローマ字は、日本の学者、
教育権威者、及び政治家より成る委員会がこれ
を決定すること。
- 3 その委員会は過渡期中、国語改良計画案を調整
する責任を持つこと。
- 4 その委員会は新聞、定期刊行物、書籍その他の
文書を通して、学校や社会生活や国民生活にロ
ーマ字を採り入れる計画と案をたてること。
- 5 その委員会はまた、いっそう民主主義的な形の

口語を完成する方途を講ずること。

- 6 国字が児童の学習時間を欠乏させる不断の原因であることを考えて、委員会をすみやかに組織すべきこと。あまりおそくならぬうちに、完全な報告と広範囲の計画が発表されることを望む。

昭和 21. 6. 15 ○ ローマ字教育対策懇談会が文部省で開かれた。

昭和 21. 6. 29 ○ ローマ字教育協議会が文部省に設置され、その第1回が開かれた。

以後、昭和 21. 10. 22 に至るまで、総会（2回）、起草協議員会（2回）、起草協議員会つづり方研究会（1回）、専門協議員会（5回）を開き、結論を得て、それを文部省に提出した。（次項参照。）

昭和 21. 10. 22 ○ ローマ字教育協議会から文部省に対し、「ローマ字教育を行ふについての意見」および、「ローマ字教育の指針（「ローマ字文の書き方」を含む。）」が提出された。

昭和 21. 10. 25 ○ 教育刷新委員会第8回総会で、昭和 22 年度から義務教育でローマ字教育を実施することが了解された。

昭和 22. 1. 20 ○ ローマ字教育の実施について、「文部当局談」が発表された。

昭和 22. 2. 28 ○ ローマ字教育の実施について、各地方長官あて、ならびに各師範学校長・各高等師範学校長

・各女子高等師範学校長あてに、文部次官から
通達が発せられた。

発教7号

文 部 次 官

昭和 22 年 2 月 28 日

各地方長官あて

国民学校においてローマ字教育を行うについて

昭和 22 年度から別紙要項に基づいて、国民学
校においてローマ字教育を行うことになったか
ら、貴管下の関係各学校に示達し、遺憾なく実施
されるよう取り計わりたい。命によって、これを
通達する。

(各師範学校長あてのものは、同じ趣旨のもので
あるから省略する。)

○ 文部省から、

国民学校におけるローマ字教育実施要項

ローマ字教育の指針

ローマ字文の書き方

が発表された。

昭和 22.12. 5 ○ ローマ字調査委員会準備会が文部省に設置さ
れた。

これは、やがて設置されるべきローマ字調査会
の性格が中正であり、公正・妥当な結論が得られ
るように、委員選出の方法・範囲、また、会の運

営方法などを協議するために設けられたもので、
昭和 23 年 1 月 29 日に至るまでに、2 回の小委
員会と 2 回の総会とを開いた。

昭和 23. 1. 29 ○ ローマ字調査委員会準備会はそれぞれの問題
について結論を得、次のような決議を行い、解
散した。

本準備会は、ローマ字問題の重要性に鑑み、本
問題に関する公正にして権威ある委員会を構成す
るための案を得ることに努めてきたが、ここに結
論を得た。ついでには本準備会の意見を基礎として
ローマ字調査委員会がすみやかに設置され、中正
妥当な結論が得られるように希望する。

昭和 23. 7. — ○ 文部省著作ローマ字教科書が次のとおり発行
された。

ローマ字読本 第 1 種	TARÔ SAN	} (小学校, 各) } (学年共通用)
ローマ字読本 第 2 種	TARÔ SAN	
ローマ字教科書 第 1 種	WATAKUSITATI NO MATI	} (中学校, 各) } (学年共通用)
ローマ字教科書 第 2 種	WATAKUSHITACHI NO MACHI	

昭和 23. 10. 12 ○ ローマ字調査会が設置された。

ローマ字調査会規程を大臣が裁定し、第 1 回の
総会は昭和 23. 11. 9 に開かれた。「つづり方に
関する主査委員会」および「ローマ字教育に関す
る主査委員会」を置き、昭和 24. 5. 31 まで存続
したが、昭和 24. 6. 1 にローマ字調査審議会に

ひきつがれた。

昭和 24. 2. — ○ 文部省著作ローマ字教科書が次のとおり発行された。

ローマ字教科書 第1種 SEKAI	} (中学校, 各)
ローマ字教科書 第2種 SEKAI	

昭和 24. 3. — ○ 文部省著作ローマ字教科書が次のとおり発行された。

ローマ字読本 第1種 TARÔ SAN (増補版)	} (小学校第4)
ローマ字読本 第2種 TARÔ SAN (増補版)	

ローマ字読本 第1種 MATI	} (小学校第5)
ローマ字読本 第2種 MACHI	

ローマ字読本 第1種 KUNI	} (小学校第6)
ローマ字読本 第2種 KUNI	

昭和 24. 7. 5 ○ ローマ字調査審議会令 (昭和 24 年 政令 第 256 号) が公布された。(昭和 25. 4. 17 廃止。)

この政令は附則によって、公布の日から施行し、
昭和 24. 6. 1 から適用された。

この政令の公布により、ローマ字調査会の委員
および審議事項などは、そっくりそのままローマ
字調査審議会に受けつがれることになった。

昭和 24. 11. 30 ○ ローマ字調査審議会委員及び臨時委員候補者
推薦方法 (文部省告示 第 193 号) が公布され、
昭和 24. 11. 1 から適用された。

昭和 25. 3. 1 ○ 「^{改訂}ローマ字教育の指針」がローマ字調査審

議会議長から文部大臣あてに建議された。

昭和 25. 4. 10 ○「ローマ字に関する学習指導要領編修協議会」が文部省に設置された。（昭和 26. 1. 24 まで存続。）

昭和 25. 4. 17 ○ 国語審議会令（昭和 25 年 政令第 85 号）が公布された。

この政令により，国語審議会にローマ字調査分科審議会が設置されることになった。なお，同時に，国語審議会令（昭和 24 年 政令第 253 号），および，ローマ字調査審議会令（昭和 24 年 政令第 256 号）が廃止された。

昭和 25. 8. — ○「日本における教育改革の進展（文部省の報告書）」が日本を訪れたアメリカの第 2 次教育使節団に提出された。

昭和 25. 9. 22 ○ 日本を訪れたアメリカの第 2 次教育使節団から報告書が連合国最高司令官に提出された。

「国語改革」についての勧告は次のとおりである。

- 1 一つのローマ字方式が最もたやすく一般に用いられうる手段を研究すること。
- 2 小学校の正規の教育課程の中にローマ字教育を加えること。
- 3 大学程度において，ローマ字研究を行い，それによって教師がローマ字に関する問題と方法と

を教師養成の課程の一部として研究する機会を
与えること。

4 (省略)

昭和 26. 6. 25 ○ 「文部省ローマ字教育実験調査研究会」が文
部省に設置された。(昭和 29. 3. 31 まで存続。)

昭和 26. 7. 5 ○ 「国語審議会の委員及び臨時委員の推薦方法
に関する 規程」(文部省令 第 16 号) が公布
された。

昭和 26. 7. 10 ○ 「学習指導要領 一般編 (試案)」が発行され
た。

ローマ字は、国語教育の一環として、小学校は
第4学年あるいは第3学年から、中学校はその
在学を通じて課することができるようになってい
る。

昭和 26. 8. 一 ○ ローマ字教育実験学級を決定し、関係各方面
に依頼した。(全国で 20 学級、昭和 29. 3.
31 まで存続。)

昭和 26. 10. 1 ○ 「中学校
高等学校 学習指導要領 国語科編 (試案)」が
発行された。

第9章 中学校の国語科におけるローマ字の学
習指導

昭和 26. 12. 15 ○ 「小学校学習指導要領 国語科編 (試案)」が
発行された。

第6章 ローマ字の学習指導

昭和 27. 3. 10 ○ ローマ字文のわかち書きについて、ローマ字調査分科審議会 分ち書き部会から、「ローマ字文の分ち書きのしかた」が第 13 回国語審議会総会に報告された。なお、これは、その後、第 14 回国語審議会総会において、他の諸事項とともに「国語審議会報告書」としてとりまとめて、国語審議会から文部大臣あてに報告された。

(昭和 27. 4. 14)

○ ローマ字のつづり方について、ローマ字調査分科審議会 つづり方部会から、第 1 読会で審議・決定した事がらが、第 13 回国語審議会総会に報告された。なお、これは、その後、第 14 回国語審議会総会において他の諸事項とともに「国語審議会報告書」としてとりまとめて、国語審議会から文部大臣あてに報告された。(昭和 27. 4. 14)

昭和 27. 4. 14 ○ ローマ字教育について、国語審議会 ローマ字教育部会から、「国語教育におけるローマ字の取扱について」が第 14 回国語審議会総会に報告された。なお、これは、他の諸事項とともに「国語審議会報告書」としてとりまとめて、同日、国語審議会から文部大臣あてに報告された。

昭和 28. 3. 12 ○ 「ローマ字つづり方の単一化について」が第

18 回国語審議会総会で可決され、直ちに国語審議会会長から文部大臣あてに建議された。

昭和 28. 8. 4 ○ 「小中学校のローマ字学習に関する答申」が教育課程審議会会長から文部大臣あてに行われた。

昭和 28. 8. 31 ○ 「小中学校のローマ字学習について」が初等中等教育局長・調査局長から関係各方面に通達（文初初第 568 号 昭和 28. 8. 31）された。

これによって、昭和 30 年度から、単一化されたつづり方でローマ字教育が実施されることになった。

昭和 29. 3. 15 ○ 「ローマ字教育について」がローマ字調査分科審議会 教育部会から第 20 回国語審議会総会に報告され、同日、国語審議会から文部大臣あてに報告された。

○ 「ローマ字文のわかち書きについて」がローマ字調査分科審議会から第 20 回国語審議会総会に報告され、同日、国語審議会から文部大臣あてに報告された。

昭和 29. 7. 1 ○ 「中学校
高等学校学習指導法 国語科編」が発行された。

これは、中学校・高等学校国語科の教師が、生徒の学習を指導するにあたって、どのようにすれば指導が効果的であり、合理的であり、また容易

であって、しかもその目標にはやく到達することが出来るかについて説いたものである。

昭和 29. 12. 9 ○ 「ローマ字のつづり方」が内閣告示第 1 号で告示された。

これは、さきに昭和 28. 3. 12 に国語審議会会長から文部大臣あて建議された「ローマ字つづり方の単一化について」の趣旨を採択したもので、そのまえがきにおいて、第 1 表・第 2 表の使用範囲を明確に定め、各省庁での使用上にさしさわりの生じないようになっており、また、現在の混乱状態から脱し、単一化に向かう機運をかもすものである。

○ 「ローマ字のつづり方の実施について」が内閣訓令第 1 号で公布された。

なお、この訓令によって、昭和 12 9. 21, 内閣訓令 第 3 号は廃止された。

昭和 30. 2. 20 ○ 「小学校学習指導書 国語科編」が発行された。

これは、学習指導要領に示してある趣旨に沿って学習指導を進める際に、教師が知っておかなければならない最も基本的な事項である「国語学習の基底と国語学習指導計画の立て方」について述べ、教師が自己の指導のしかたについての反省の手がかりともなる具体例を述べたものである。

昭和 31. 7. 5 ○ 「国語教育におけるローマ字教育について」

がローマ字調査分科審議会から、第 32 回国語審議会総会に報告され、同日、国語審議会から文部大臣あてに報告された。

この全文は「第 2 部 資料」に収録してある。

あとがき：

以上はローマ字教育に関係のあるいろいろの事がらのうち、文部省関係の発表事項・諸施策などについての概略を年代順にまとめたものである。

この年表に掲げられたいろいろの資料の実際については記載を省略したものが多いが、なかには参考のため、その概要を掲げたものもいくつかある。なお、これらの資料のほとんどは「ローマ字問題資料集 第 1 集」(国語シリーズ 23) に収録されている。

当用漢字音訓表の音訓数

この表は、当用漢字音訓表の漢字 1850 字を、その音訓数によって整理したものである。排列は当用漢字表に掲げてある漢字の順によった。

当用漢字音訓表の音訓数

1 音 0 訓 丈不丙丹乙乾了亜亡亨仁介他令以件伐伯佐佳例侯俊俗
信排併個倍候倣倫偏倂偶傍傑債像僚僧儀億俟儒兆克兩
兵具典冊冗准凡凶刊刑列判利到制券則剖剛剩副創劇劑
効効勅勉勘勞勲勺匠匿区升午卒卓協博却即厘叔句可史
司吉后吏吟呈吳周員哲峻唐唯啓善喚喫單嗣噴嚇囑囚圈
円団在均坊坑垂域培堂塊塑塔墜墮墳墾壇圧壘壊土壮老
央奇奏奔奨奴妃妊妙妥委姻威娛娠婆婚婦媒嫡孃孔孝季
孤宅宇完官宙宜宣宰害宴容密察寡寧審寛寮寸将専尉尺
尿局屈展層履属岐峽崇崩巨希帝帥師席帳帽幣幽序府度
座庫庶康庸廉廊廐庠延弊式弧彈彩彰往征律徐徑徒復循
微微德徹忠念怖恒恩恭悦患悼惰想愁愉意愛感慈態慌慘
慢慨慮慶憩憲憶憾懇応懷房才扶批技抄抑抗抵抽拓拘拙
括拷掌排接措提揮援損搬搾摩撤撮撲擁扱担擦拳擬拏撰
支故叙敏敢敵斗料斤斥旋族旬昇昨昭是晚普景晶暫曜服
朕未本朱材析枚架某查校核格栽案条械棄棋棒棺概楼標

味呼和哀品唱商問喜喪嘆器四因困固圉園坂型埋城墜
堤堪報場塗墓增墨壁寿夏夕多夢天夫失奉契奪奮妨妹妻
姉始姿婿嫁字孫学安室寂寄富寒寢写宝寺射尊尋導尼尾
居屋山岩岸峰島岳川巡巢左巧差市布帆常幅年幸幹幻幼
幾底店庭庑建弓弔引弦弱張彫影待得從心必忌忍志忘忙
快怒思怠急怪恥恨息悟悲情感惜惡恼愚慎慕慣慰憎憤懲
我戒戰戲戶所扇手打承投折抱扠拒拔招拝持指振捕捨掃
授掘採探控推描揚換握揭搖搜携摘擊操収改攻教救敗散
敬敷整斜方旅旗既旨早映春時昼晴暇暑暖暗曆曇曉曲更
書替最朗朝末札机朽村東杯東松林果枝枯染柱柳根桃桑
梅森植榮構樣橋機橫桜欲欺止歸死殘母比毛氏民水水求
汗污江池決沈沸油沼浴泉泊波泣注泳洗浦浴海浸涼淚淡
深混清浅添減渡測港湖湯源溶減滯滿漂漆潔潜潤潮澄沢
激濁濃湿濟浜火灰災炎炭焦煮煙照煩熱燃燒營争父片牛
牧犬犯狂狩狹獲獸玉珍現琴甘産用田申町異当量疑疲痛
癖的皆皮盜尽目盲真眠眼知短破碎確礎社祈祝祭私秋移
種稻穗穩穴空突窓窮立端竹笑笛筆等筋筒答管節築粒粘
紙紛紡紫終組絶統糸絹綱網綿緒締縁編練縛縫縮縦繕繭
継続欠罪置羊美習翼老考者耐耕耳聞声肝肥肩育背胸脅
脱腐腕腰腹廬臨臭至与舌舞舟船良花芳芽苗茂草荷莖菜
落葉葬蒸薄蔵藥虫蚕血衣衰袋被裁裂裏補裸襲見覚角触
計討訪設許訴詔試詰話詳誇認誓誘語誠誤調謠詛營變讓
谷豐豚貫責買貸費賜賢壳頼贈走趣跡路踊踏身車軒載輕

輝輪辛迎近返迫述迷迫退送逃逆透速造進遂遊運過道遑
遲選避配酒酢醉醜里野量針鈍鉛銳錘錢鍛鎖鏡鐘鑄長門
閉開闕防限除陰陵陷隔隣險隱集雇離難雨雪雲雷震霜霧
露響頂預額顏願顧風飛翻飢飲飯飼飽飾養余首香馬騷馭
驚骨高髮鬼魂魚鯨鳥鷄塩麗麦麻默鼓鼻齒 (786)

1 音 2 訓 乳交代值冷凍助占及向基夜好宿寒少帶干床延彼恐悔憂
恋押放数新断暮柄歌浮消漏洩病積粉細結絞着群羽若苦
荒著表親負起越足通連降雄雌面鳴黑 (64)

1 音 3 訓 初小並 (3)

1 音 4 訓 上 (1)

2 音 0 訓 丁京依便兒功匹反蔽地奧如姓存宗客封对就州工己幕役
性懸拍拋文易暴期業極權模武歲氣漁然猷甲画癸皇精素
繪台万虚衆象質遺鄉雜体 (59)

2 音 1 訓 一世主久九井人今伴作修飯元兄内切力化去口右名命回
囟土執境大太女子守定弟強御惠成拾政施昔星会月有望
木板柔樂次正殺治流無物率由男留登相砂示神競米經綠
織自興色装西解説読豆貧遠都金鈴静頭黄 (90)

2 音 2 訓 仰供出外家平形後日歩殿白盛直省紅言請赤間青音食
(23)

2 音 3 訓 明重 (2)

2 音 4 訓 生 (1)

2 音 5 訓 下 (1)

3 音 1 訓 分宮石納 (4)

3 音 3 訓 行 (1)

1 訓だけ 且但刈勿卸又咲坪姫娘届峠扱掛株冲津滝瀬畝矢箱繰芋

芝虞蚊貝込 (29)

2 訓だけ 畑 (1)

(計 1850 字)

当用漢字音訓表の音訓数

音訓総数 3122 (漢字総数 1850 字)

音の数 2006 (1820字) 内、音だけのもの 903 (844字)

訓の数 1116 (1006字) 内、訓だけのもの 31 (30字)

音訓ともにあるもの 2188 { 1103 音訓 (976字)
1085 訓

1850 字 3122 音訓

音 訓	0	1 音	2 音	3 音	計
0	0	785 字 (785)音 (0)訓	59 字 (118)音 (0)訓	0	844 字 (903)音 (0)訓
1 訓	29 字 (0)音 (29)訓	786 字 (786)音 (786)訓	90 字 (180)音 (90)訓	4 字 (12)音 (4)訓	909 字 (978)音 (909)訓
2 訓	1 字 (0)音 (2)訓	64 字 (64)音 (128)訓	23 字 (46)音 (46)訓	0	88 字 (110)音 (176)訓
3 訓	0	3 字 (3)音 (9)訓	2 字 (4)音 (6)訓	1 字 (3)音 (3)訓	6 字 (10)音 (18)訓
4 訓	0	1 字 (1)音 (4)訓	1 字 (2)音 (4)訓	0	2 字 (3)音 (8)訓
5 訓	0	0	1 字 (2)音 (5)訓	0	1 字 (2)音 (5)訓
計	30 字 (0)音 (31)訓	1,639 字 (1,639)音 (927)訓	176 字 (352)音 (151)訓	5 字 (15)音 (7)訓	1,850 字 (2,006)音 (1,116)訓

当用漢字字画順表（案）

この字画順表は、当用漢字字体表の漢字 1850 字を、字画順に並べたものである。ただし特に字体の変ったことによって字画の変った字を各その画数の中に加えることに重点をおいた。これはまだ試案にとどまるが、参考までに掲げた。

なお、あとに、当用漢字字体表の漢字（新字体）と当用漢字表の漢字（旧字体）とについて、それぞれの字画数に所属する漢字の数の比較を表で示した。

表中、各画数に示した数字は、教育漢字を含む数である。なお、当用漢字字体表（新字体）の中の教育漢字の数を（ ）内に入れて示した。

当用漢字字画順表（案）

（ただし、当用漢字字体表による。）

1 画	一乙	(2 字)
2 画	丁七九了二人入八刀力十又	(12 字)
3 画	丈三上下丸久亡凡刃勺千及口土土夕大女子寸小山川工 己干弓才与万	(30 字)
4 画	不中丹乏互五井仁今介仏元内公六冗凶分切刈収化匹区 升午友反円天太夫孔少尺幻巾引心戸手支収文斗斤方日 月木止比毛氏水火父片牛犬王欠予双	(64 字)

- 5 画 且世丘丙主仕他付代令以兄冊冬出刊功加包北半占去古
句召可史右司囚四厶外央失奴享尼左巧巨市布平幼庠
必打扌斥未末本札正母民水永犯玄玉甘生用田由甲申白
皮目矛矢石示礼穴立台旧処号弁込辺 (88 字)
- 6 画 交仰仲件任企伏伐休仮伝充兆先光全兩共再刑列劣匠印
危叫各合吉同名后吏吐向吸回因团在地壮多好如妃字存
宅宇守安寺州巡帆年式忙成扱旨早旬曲会有朱机朽次死
每氦汗汚江池灰争当百尽竹米糸羊羽老考耳肉自至舌舟
色芋芝虫血行衣西式迅 (106 字)
- 7 画 乱亜伯伴伸伺似但位低住佐何作来克兕兵冷初判别利助
努劳励却卵即君吟否含呈呉吹告困囿圉坂均坊坑毫寿妊
妙妥妨孝完对尾尿局岐希床序延廷弟形役忌忍志忘快応
我戒扶批技抄抑投抗折拔扱改攻更材村束条求決汽沈没
沖沢災状狂男町杜秀私究系声肖肝臣良花芳芽芸見角言
谷豆貝壳赤走足身車辛迎近返邦邪医里防余体麦
(141 字)
- 8 画 乳事享京佳使例侍供依侮併価免具典到制刷券刺刻効効
卒卓協卸参叔取受周味呼命和固国坪垂夜奇奉奔妹妻姉
始姓委季学宗官宙定宜実宝居届屈岩岸岳幸底店府弦彼
往征径忠念怖性怪房所承抱抵押抽拍拒拓拘拙招拝担扱
抃放昇明易昔服杯束松板析林枚果枝枢欧殴歩武毒河沸
油治沼治況泊泌法波泣注泳炊炎炉版牧物画的盲知祈祉
空突並者肥肩膀肯育舍苗若苦英茂茎表迫迭述邸金長門

阻附雨青非

(173 字)

- 9 画 乘候侵係便促俊俗保信冒冠則削前勅勇卑南卷厘厚咲哀
品单型城奏契姻姿威孤客宣室封專屋岬峡帝帥幽度建弧
待律後怒思怠急恒恨悔括拷拾持指政故叙施星映春昨昭
是屋枯架柄某染柔查柱柳荣段泉洋洗津活派海淨淺炭為
牲狩狹独珍界烟疫癸皆皇盆直相盾省看砂研碎祖祝神秋
科秒窃糾紀約紅級美耐肺胃背胎胞胆臭茶草荒莊虐要訂
計变貞負赴軌軍迷追退送逃逆郊郎重限面革音風飛食首
香点 (170 字)

- 10 画 修俳倭倉個倍倒候借傲倫儉兼准凍剖剛劑劍勉匿原員哲
峻虐埋夏姬娘娛娠孫宮宰害宴家容射將展峰島差師席帶
座庫庭弱徐徒從恐恥恩恭息悅悟惠惱恋扇振捕搜拳敏料
旅既時書朕朗校株核根格栽桃案桑梅桜帰殉殊殘殺泰流
浦浪浮浴浸消淚浜烈特珠班畔留畜畝疲疾病症益真眠砲
破秘祥租秩称笑粉粹紋納純紙紛素紡索梟翁耕耗胴胸能
脂脅脈致航般荷華蚊蚤衰衷被討訓託記財貢起軒辱透逐
途通速造連逦郡配酒針降陞院陣除陷隻飢馬骨高鬼党
(191 字)

- 11 画 乾值偏停健側偶偽剩副動勘務唯唱商問啓域執培基堂婆
婚婦宿寂寄密尉崇崩巢帳常庶康庸張強彩彫得御患悼情
惜惡慘捨掃授排掘掛採探接控推措描揭教救敗斜断旋族
望械欲涉液涼淑淡深混清添渴涉濟猛獵率現球理產略異
盛盜眼票祭移室窓章笛符第粒粗粘紫累細紳紹紺終組經

翌習肅脚脱腦舶船菊菌菓菜著虛術袋規視訟訪設許訊豚
貧貨販貫責赦軟轉逮週進逸部郭郵都鄉醉穠野閉陪陰陳
陵陶陸險雪頂魚烏麻黃黑齋 (180 字)

12 画 偉傍備割創勝募勤博善喚喜喪喫圈堅堤堪報場墮塔罌奧
媚媒富寒尊尋就属帽幅幾廊廢彈復循悲惑愔愉慌掌提揚
換握援揮搖敢散敬晚普景晴晶暑曉替最朝期棋棒森棺極
檢欺款減渡測港湖湯溫滋滿濕灣無焦然煮燒宮猶琴番置
疎痘痛痢登短硝硫硬稅程童筆等筋筒答策粧結絕絞絡給
統繪着脹腕落葉葬蛩衆街裁裂裕補裝覺訴診詐詔評詞詠
証象貯貴買貸費賀賀超越距軸輕遂遇遊運遍過道達遲酢
量鈍開閑間陽隆隊階隨雄雅集雇雲項順飲飯齒 (188 字)

13 画 傑催債傷傾勸僧勢勸嗣嘆園塊塑塗墓夢媵嫁寢寬幕幹廉
微想愁意思愛感慎慈慨戰損搬携搾掇數新暇暖暗棄植業
樂樓歲殖殿源準溶滅滑滯漠淹煙照煩猷痴盟睡督碁禁禍
福禪稚節絹繼續罪署群義聖腰腸腹艇蒸蓄虜虞裏裸解觸
試詩詰話該詳誇誠譽豐質賄資賊跡路跳踐較載辭農違遠
遣酬酪鈴鉛鉄鉍隔雌零雷電預頒飼飽飾塩鼓 (139 字)

14 画 像僚境增墨奪嫡察寡寧層彰徵德態慕慢慣憎摘旗暮曆構
概模樣歌歷滴漁漂漆漏演漫漸獄疑碑磁種稻穀端箇算管
精綠維綱網綿緒練綵置罰聞腐膜製複誌認誓誕誘語誤說
誦豪踊適遭酵酷酸銀銃銅銃銘錢閣閤閤際障隱雜需靜領
驅馱髮魂鳴鼻 (102 字)

15 画 儀億劇勲器噴囑墜墳審寮導履幣弊影徹慮慰慶憂憤戲摩

撤撮撲擊敵敷暫暴標橫權歛潔潛潤潮澄熟熱監盤確稿穗
窮窳箱範緊線締緣編緩罷廣舖舞葳衝課調談請論諸諾謁
賓賜賞賠賦質贅趣踏輝輩輪遵遷選遺銳鑄閱震靈養餓駐
魅默 (98 字)

16 画 儒凝壑壁壇壞奮嬖憩憲憶憾懷擁操整曇樹橋機激濁濃燃
燈獲獸積穩築篤糖緯縛縫縱繁膨興薄薦薪薰菜融衡衡親
論諮謀謠賢賴輸避還鋼錄錘錠錯鍊隣隸頭館 (67 字)

17 画 償優嚇蔽懇擦擬燥爵犧環療礁縮績絨翼聰覽膳謙講謝謹
購轄醜鍛霜鮮齡 (31 字)

18 画 懲曜濫癖瞬礎穫簡糧織繕繭職臨藩覆觀贈鎖鎮離難題額
顏類頭翻騎騷驗鬪 (32 字)

19 画 瀨爆璽簿縹臧識譜警鏡霧韻願髓鯨鷄麗 (17 字)

20 画 欄競籍議護讓釀鐘響騰 (10 字)

21 画 懸艦躍露顧魔 (6 字)

22 画 驚 (1 字)

23 画 襲鑑 (2 字)

(計 1850 字)

当用漢字表と当用漢字字体表との漢字の字画数対照表

画 数	当用漢字字体 表〔() 内 教育漢字〕	当用漢字表	画 数	当用漢字字体 表〔() 内 教育漢字〕	当用漢字表
1	2 (1)	2	14	102 (47)	106
2	12 (12)	12	15	98 (27)	110
3	30 (19)	28	16	67 (17)	66
4	64 (45)	63	17	31 (4)	47
5	88 (63)	33	18	32 (11)	23
6	106 (64)	97	19	17 (3)	26
7	141 (81)	133	20	10 (3)	13
8	173 (92)	171	21	6 (0)	14
9	170 (88)	157	22	1 (0)	7
10	191 (83)	181	23	2 (0)	4
11	180 (83)	185	24	0 (0)	2
12	188 (89)	178	25	0 (0)	1
13	139 (49)	144	合 計 1850 (881), 1850		

昭和31年度国語教育研究協議会の記録

〔趣 旨〕

国語の改善と国語教育とは密接な関係にある。よって、国語政策に基づく国語教育上の文字・ことばについての諸問題を研究協議することによって、国語教育の充実発展をはかり、また今後の国語改善方策のよりどころを得ようとするものである。

〔開催地域と日時〕

中部地区（会場——福井大学）	10月20日（土） 21日（日）
西部地区（会場——高知大学）	11月30日（金） 12月1日（土）
東部地区（会場——群馬大学）	12月1日（土） 2日（日）

〔各地の状況〕

中 部 地 区

主 催 文部省・福井大学・福井県教育委員会

講 演

文法教育の位置づけ	東京大学教授 文学博士	時 枝 誠 記
表現の教育について	東京教育大学教授	石 井 庄 司
国語教育と文法	福 井 大 学 教 授	佐 藤 茂
国語改善と国語教育	文部省調査局国語課長	白 石 大 二

研究発表と協議

(1) 小 学 校 部 会

低学年における句読点指導の問題点とその指導

静岡大学教育学部付属静岡小学校 相 田 芳 男

語法指導について

滋賀県愛知郡愛知川小学校 辰 巳 嘉 津 一

小学校における語法指導について

—— 1 年生の場合 ——

石川県江沼郡山代小学校 小 中 弘 一

はなしことばにおける語法指導

—— 研究の方向づけのために ——

福井市春山小学校 佐 藤 一 男

協議題 読みと語法の指導

司 会 福井県教育委員会南越支局長 田 中 幸

指 導 東京大学教授 時 枝 誠 記

福井大学教授 佐 藤 茂

福井大学講師 三 浦 東 吾

(2) 中学校部会

中学校における国文法指導のあり方

富山市奥田中学校 林 潤 次

国語の本質をはっきりさせるころみ

三重県飯南郡森中学校 鈴 木 尚 義

文 法 の 指 導

—— 文章の読解力、文法的思考力および

文法知識の理解力の相関について ——

岐阜大学学芸学部付属加納中学校 浅 野 和 夫

文法指導上の諸問題

—— 書きことばにおける語法指導について ——

福井市光陽中学校 須 藤 登 志 夫

協議題 読解および作文のための文法教育はどうあるべきか

司 会 福井県坂井郡鳴鹿小学校長 牧 野 正 次

指 導 福井大学講師 岡 田 正 世

同 坂 本 政 親

文部省調査局国語課長 白 石 大 二

(3) 高等学校部会

手紙文にあらわれた高校生の敬語

—— 尊他語・謙讓語・丁寧語の混乱 ——

愛知県立岡崎北高等学校 元 松 静 江
日本語表現の特質について

——特に助詞・助動詞について——

福井県立鯖江高等学校 辻 森 秀 英
協議題 表現力の問題

——作文教育をどうすればよいか——

司 会 福井県藤島高等学校 印 牧 恵
指 導 東京教育大学教授 石 井 庄 司
福井大学助教授 青 木 紀 元

(4) 全 体 協 議 会

主 題 国語教育と国語改善

司 会 文部省調査局国語課長 白 石 大 二
指 導 講 師 全 員
進 行 福井大学付属小学校 松 村 伊 佐 武
記 録 同 東 出 市 二 郎

西 部 地 区

主 催 文部省・高知大学・高知県教育委員会

講 演

国語教育と文法教育

京都大学教授 文学博士 遠 藤 嘉 基

国語問題の動向と将来

カナモジカイ理事長 松 坂 忠 則

かなづかいの問題点

高知大学助教授 吉 野 忠

国語改善と国語教育

文部省調査局国語課長 白 石 大 二

公 開 授 業

(1) 小学校 (会場 小高坂小学校)

1年 がっこうから おうちへ

高知大学付属小学校 垣 内 康 喜

2年 ゆ う び ん

高知市立追手前小学校 三 木 外 師 盛

3年 手ぶくろを買いに

高知大学付属小学校 北 村 誓 男

4年 読書の道（十和田のひめます）

高知市立小高坂小学校 安 丸 貞 雄

5年 ABC no Uta

高知市立一宮小学校 一 間 修

6年 さ ら の 色

高知大学付属小学校 清 川 忠 彦

(2) 中学校（会場 小津高校）

1年 天 文 学 者

高知大学付属中学校 内 田 祥 穂

2年 信 号

高知市立城東中学校 大 野 澄 江

3年 中 世 の 文 学

高知市立城西中学校 岡 部 芳 男

(3) 高等学校（会場 小津高校）

1年 手 紙（牛になれ——夏目漱石）

高知県立小津高等学校 白 石 静 香

2年 枕草子（御かたがた）

高知県立小津高等学校 示 野 昇

3年 源氏物語（紫の上の死）

高知県立小津高等学校 竹 村 義 一

研究発表と協議

(1) 小 学 校 部 会

ローマ字教育について

高知市一宮小学校 一 間 修

小学校の文法教育

高知県長岡郡本山小学校 中 町 子 菊

児童の「漢字力」の実態とその指導の問題点

高知県幡多郡大奈路小学校 中 野 享
文学教育について

高知県安芸郡三高小学校 井 津 清 寿

協議題

漢 字 学 習

国語表現（ローマ字教育・文法教育を含む。）

文 学 教 育

司 会

高知市立江陽小学校

井 上 弥 太 郎

同 昭和小学校

依 光 賢 一 郎

指 導

カナモジカイ理事長

松 坂 忠 則

高知大学文理学部教授

荒 木 修

同 教育学部助教授

吉 野 忠

高知市教育研究所主事

塩 田 正 年

(2) 中 学 校 部 会

文学教育を地につけるために

愛媛大学教育学部附属中学校

更 科 正 道

聴写のおすすめ

高知大学教育学部附属中学校

内 田 祥 穂

協議題

国 語 表 記

文 法 教 育（標準語教育を含む。）

文 学 教 育

司 会

高知県立ろう学校

上 岡 武 猪

高知市立城北中学校

松 本 純 一

指 導

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

高知大学教授

松 村 誠 一

同 助教授

岡 林 清 水

高知県教育委員会指導主事

佐 藤 い づ み

(3) 高等学校部会

高校国語科における漢字学習について

高知県立追手前高等学校

藤 田 喜 三 郎

かなづかいと送りがなの問題

高知県立丸の内高等学校 中 村 伝 喜

文法教育の問題点

福岡市福岡商業高等学校 上 野 正 澄

文法教育について

高知県立清水高等学校 森 尾 利 平

古典教材における文学教育について

高知県立追手前高等学校 森 下 幸 男

文学教育における教科書批判を中心にして

高知県立室戸高等学校吉良川分校 木 戸 昭 平

文学教育について

高知県立丸の内高等学校 水 野 正 巳

協議題

文 学 教 育

漢字学習および国語表記

文 法 教 育

司 会

高知県立丸の内高等学校

田 村 牧 夫

同 山田高等学校

浜 田 源

指 導

京都大学教授

遠 藤 嘉 基

高知大学教育学部長

村 上 徳 美

同 教授

石 津 純 道

高知県立女子大学教授

山 崎 良 幸

(4) 全 体 協 議 会

主 題 古典学習への移行行きにおけるかなづかいの問題

司 会

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

指 導

講 師 全 員

東 部 地 区

主 催 文部省・群馬大学学芸学部・群馬県教育委員会

講 演

これまでとこれから

	芸術院会員 文学博士	土 岐 善 磨
最近の言語心理学の動き		
	お茶の水女子大学教授 文学博士	波 多 野 完 治
標準語と敬語の教育		
	群馬大学教授	山 崎 久 之
国語政策について		
	文部省調査局国語課	塩 田 紀 和
研究発表と協議		
(1) 小 学 校 部 会		
子どもたちはどんなことばを使っているか		
	太田市立蕨川小学校	小 林 ふ く
小学校1年生としてどれだけ読めるか		
——教科書を中心として——		
	群馬県山田郡大間々小学校	加 藤 貞 三
漢字の読み書き能力と指導		
	群馬県吾妻郡高山西小学校	山 田 泰 三
国語教育における現代かなづかい指導の問題点について		
	前橋市立東小学校	斎 藤 三 郎
ローマ字指導について		
	富岡市立富岡小学校	山 田 昇
司 会	前橋市立東小学校	土 屋 利 雄
	群馬県教育委員会指導主事	広 田 良
指 導	群馬大学助教授	勝 山 功
	文部省調査局国語課	塩 田 紀 和
記 録	群馬県教育委員会指導主事	久 保 田 武
(2) 中 学 校 部 会		
ローマ字を使っての文法説明		
	太田市立南中学校	稲 垣 祐 央
中学校における文法指導		
——白文指導の提唱——		
	前橋市立第二中学校	中 村 京 一

一つのともしびをみつめる

——詩歌学習についての管見——

	富岡市立富岡中学校	鈴木久雄
司 会	伊勢崎市立南中学校	金井茂市郎
	群馬県教育委員会指導主事	金井博之
指 導	群馬大学学芸学部助教授	和田利男
	文部省調査局国語課文部事務官	大宮清名
記 録	群馬県教育委員会指導主事	島田誠一

(3) 高等学校部会

高等学校にける漢字習得の実態について

群馬県立桐生高等学校 館内 光

国語表記についての疑義

群馬県立前橋商業高等学校 原田種成

国語表記の問題

——特に送りがな法について——

	群馬県立伊勢崎女子高等学校	栗原安雄
司 会	群馬県立渋川女子高等学校	斎藤貞雄
	群馬大学学芸学部講師	池上二良
指 導	同 助教授	有川美亀男
記 録	群馬県教育委員会指導主事	由良孝作

(4) 全体協議会

主 題 国語学習基本語いの問題

司 会	文部省調査局国語課	塩田紀和
指 導	群馬大学教授	山崎久之
	同 助教授	勝山 功
	同 同	和田利男
	同 同	有川美亀男
	文部省調査局国語課	大宮清名
	群馬県教育委員会指導主事	市川三郎
記 録	同	高野寛順

国語シリーズ収録資料目録

注 ここには、各資料の収録されている本のシリーズ番号を示したので、その書名は、この巻末に付されている国語シリーズ一覧を御覧ください。

当 用 漢 字 表

	巻数
当用漢字表（昭和21. 11. 16 内閣訓令第7号，同告示第32号）……………	21
当用漢字表審議報告（補正案）（昭和29. 3. 15）……………	26

当 用 漢 字 別 表

当用漢字別表（昭和23. 2. 16 内閣訓令第1号，同告示第1号）……………	21
当用漢字別表に関する主査委員長報告……………	14

当 用 漢 字 音 訓 表

当用漢字音訓表（昭和23. 2. 16 内閣訓令第2号，同告示第2号）……………	21
五十音順当用漢字音訓索引……………	21
当用漢字音訓表に関する主査委員長報告……………	14
当用漢字音訓表の音訓数……………	33

当 用 漢 字 字 体 表

当用漢字字体表（昭和24. 4. 28 内閣訓令第1号，同告示第1号）……………	21
当用漢字字体表に関する主査委員長報告……………	14
当用漢字字画順表（案）……………	33

人 名 用 漢 字 別 表

人名用漢字別表（昭和26. 5. 25 内閣訓令第1号，同告示第1号）……………	5, 21, 26
--	-----------

同音の漢字による書きかえ

「同音の漢字による書きかえ」について（昭和31. 7. 5 国語審議会報告）……35

漢字の学年配当

昭和 27・28 年度調査報告	24
学習漢字学年別配当試案	24
漢字指導語形集	24

地名の漢字

町村の合併によって新しくつけられる地名の

書き表わし方について（昭和28. 10. 8 国語審議会建議）……19, 21, 26

現代かなづかい

現代かなづかい（昭和21. 11. 16 内閣訓令第8号，同告示第33号）	21
現代かなづかいに関する主査委員長報告	14
現代かなづかいの要領	21
明治以降におけるかなづかい問題の書目	12

正書法

正書法について（昭和31. 7. 5 国語審議会報告）……35

話しことば

話しことばの改善について（昭和31. 7. 5 国語審議会建議）……33

これからの敬語

これから！敬語（昭和27. 4. 14 国語審議会建議）……26, 33

外国語・外来語の表記

学術用語の表記について

（昭和27. 12. 8 国語審議会会長から学術用語分科審議会会長あて回答）……14

外来語の表記について(付, 外来語用例集)(昭和29. 3. 15 国語審議会報告) …	27
外国の地名・人名の書き方(案)(昭和21. 3 文部省国語調査室編) …	27

公 用 文

公用文改善の趣旨徹底について(昭和26. 10. 30 国語審議会建議) …	21
公用文の左横書きについて(昭和26. 10. 30 国語審議会建議) …	21
公用文改善の趣旨徹底について(「公用文作成の要領」) …	21
(昭和27. 4. 4 内閣閣令第16号依命通知) …	21
公用文改善に関する次官会議(決定・申合せ・了解) …	21
公用文改善事業の沿革(年表) …	21
文部省公文書の書式(昭和25. 3) …	21
文部省あて公文書の書式(昭和28. 11) …	21
文部省用字用語例(昭和28. 11) …	21
文部省電話のかけ方(昭和28. 11) …	21

法 令 用 語

法令の用語用字の改善について(昭和25. 11. 7 国語審議会建議) …	21
法令用語改善についての建議(昭和29. 3. 15 国語審議会建議) …	25
法令用語の改善について(昭和29. 10. 7 次官会議申合せ) …	25
法令用語の改正の方針(「法令用語改正要領」)	
(昭和29. 11. 25 内閣法制局次長通達) …	25, 26

国 語 白 書

国語審議会 国語問題要領(昭和25. 6. 12 国語審議会報告) …	4, 26
-------------------------------------	-------

かなの教え方

かなの教え方について(昭和30. 7. 1 国語審議会報告) …	29
----------------------------------	----

学 術 用 語

学術用語集序文 …	29
-----------	----

学術用語集まえがき	29
専門用語の統一に関する次官会議申合事項 (昭和29. 7. 8)	29

ロ　ー　マ　字

ローマ字のつづり方 (昭和29. 12. 9 内閣訓令第1号, 同告示第1号)	23, 26
小・中学校　ローマ字学習について (昭和28. 8. 31 文初初第568号通達)	19, 23
通達・報告・訓令・告示・建議・要項等集録 (明治33. 11. 5—昭和29. 12. 9)	23
文献集録	23
会議記録	23
連合国最高司令部指令等	23
文部省ローマ字教育実験調査	9, 10, 18
国語教育におけるローマ字教育について (昭和31. 7. 5 国語審議会報告)	33

そ　の　他

昭和 30 年度国語教育研究協議会の記録	29
昭和 31 年度　　　　　〃	33
国語シリーズ収録資料目録	33
国語改善に関する略年表	33
国語問題問答 (集1集—第5第) 総索引	33

「国語問題問答」(第1集～第5集) 総索引

当 用 漢 字

集 併

当用漢字選定の基準……………	1—1
「使用上の注意事項」の 説明……………	2—3

当用漢字の補正

当用漢字表の補正……………	3—5
---------------	-----

教 育 漢 字

当用漢字別表(主査委員 長報告)……………	1—37
漢字と義務教育……………	1—43
教育漢字に「𪛗」「𪛘」 は不必要ではないか……………	2—8

音 訓

当用漢字音訓表(主査委員 長報告)……………	1—7
1音だけの字……………	5—1
「菊」は音か訓か……………	5—1
当用漢字音訓表の音訓数…	5—94

漢語の読み方

情 緒……………	1—15
施 行……………	2—1
施 業……………	2—1

世 論……………	2—1
世 帯……………	2—1
博 士……………	2—1
詩 歌……………	2—2
富 貴……………	2—2
砂 鉄……………	2—2
水 郷……………	3—37
熟語の読み……………	4—1
「口こう」と「口くう」……	4—2
「復興」と「復腔」……………	4—3
合評会……………	5—2
障 子……………	5—2
芸術, 美術, 技術……………	5—3

漢 語 と 漢 字

漢語の整理……………	1—3
絃と弦……………	1—4
「言う」と「云う」……………	1—92
部首について……………	1—97, 2—16
年 令……………	2—9
12 才……………	2—9
冒 険……………	2—9
探 検……………	2—9
「価格」と「価額」……………	2—10
「車輛」と「車両」……………	2—10
「批難」と「非難」……………	2—10
「排列」と「配列」……………	2—10
しょうゆ……………	2—10

音のない漢字	2—15
動植物の漢字	3—7
あて字	3—8
也	4—4
「寄附」と「寄付」	4—5
「明瞭」と「明了」	4—6
「味」と「味わう」	4—6
「学級編成」と	
「学級編制」	5—4
「繁殖」と「蕃殖」	5—4
「天守閣」と「天主閣」	5—5
「玆」という字	5—5
漢和辞典の部首	5—6

固 有 名 詞

固有名詞と新字体	1—33
人名用漢字について	1—44
地名に使う漢字について	
の建議（本文）	2—26, 3—11
人名用漢字（本文）	3—9
児童の氏名の字体	5—7
履歴書の字体	5—8

字 体

当用漢字字体表（主査委員長報告）	1—18
シンニュウの書き方	1—29
「者」のテン	1—30
教・舎・黄・婦・芸・内	
蔵・旅	1—31
桧	1—33

養	1—33
確	1—33
薄	1—34
様	1—34
棄と肅	1—34
静	1—35
船のへん	1—35
疎のへん	1—98
童	2—12
冷	2—12
夢	2—12
新聞の活字	2—12
旧字体はまちがいか	2—13 3—25
人名用漢字の字体	3—10
式	3—26
海	3—26
総と聡	3—26
急	3—28
しんにゅう	3—28
證と証	4—6
衆と衆, 純と純	4—8
当用漢字の行書と草書	4—9
教科書体活字の	
「木」と「木」	4—9
新字体と字原	5—8
分	5—9
吉	5—10
監	5—12
満	5—12
感	5—13
内	5—13

くさかんむり……………	5—14
しんにゅうの書き方……………	5—14
悩のつくり……………	5—15
しんにゅうの画数……………	5—15
当用漢字字画順表(案) ……	5—99

略 字

略字について……………	1—35, 3—27
新しい略字……………	5—16
灯……………	3—27, 5—17

漢 字 の 学 習

書取の	
採点について…	2—13, 3—29
門と内……………	5—18
音だけの漢字の指導……………	5—18

筆 順

夢……………	2—12
筆順の基準……………	2—14
新旧字体の筆順……………	2—14
筆順のきまり……………	3—29
必……………	3—30

漢字の学年配当

漢字の学年配当に	
ついて……………	2—18, 5—19

現代かなづかい

現代かなづかい(主査委員	
長報告)……………	1—48

かなづかいの意義……………	1—60
会 津……………	1—63, 2—20, 3—32
焼津, 飯塚……………	1—63
助詞「は」「へ」……………	1—64, 3—31
「ゆう」か「いう」か……………	1—65
「とおる」か	
「とうる」か……………	1—65
「きれい」「せんせい」…	1—66
「地」は「ち」か	
「じ」か……………	1—66
「はなぢ」か	
「はなじ」か……………	1—67
「ずつ」か「づつ」か……………	1—67
「まちか」か	
「まじか」か……………	1—67
「世界じゅう」か	
「世界ぢゅう」か……………	1—68, 5—26
「基づく」か「基く」か……………	1—68
「魚づくし」か	
「魚ずくし」か……………	1—68
「腕づく」か	
「腕ずく」か……………	1—69
次のとおり……………	1—91
呼び声は「おおい」か	
「おうい」か……………	2—19
大 阪……………	2—19
舞鶴・浅茅が原……………	2—20
国府津……………	2—20, 3—32
ルビのよう音……………	2—20
長音の「う」……………	3—30
「利雄」さんのふりがな…	4—10

「今日は」、「今晚は」……	4—11
「きうり」か	
「きゅうり」か……	4—12
「は、へ、を」の除外例…	5—21
「じ・ぢ」「ず・づ」の	
書きわけ……	5—23
「藤原」のふりがな……	5—23
「志津子」のふりがな……	5—25
「国旗」は「こくき」か	
「こっき」か……	5—25
「ちえっ」……	5—26
本則ということ……	5—26

送 り が な

「基づく」「基く」……	1—68
送りがなについて…	1—86, 3—32
送りがなの統一……	1—88
「当る」と「当てる」……	1—90
次の……	1—91
「当る」と「当たる」……	1—91
「明かるい」と	
「明るい」……	1—92, 5—28
すくなくない……	2—21
戸締り, 限り, 答え,	
受取書……	3—33
「現われる」と	
「現れる」……	5—27
送りがなの指導と	
文法との交渉……	5—29
「書留」か	
「書き留め」か……	5—29

埋める……	5—30
公用文の送りがな……	5—30
明治40年刊「送仮名法」…	5—30

漢字とかなの用い方

三か条……	1—5
「他」「外」「ほか」……	1—16
「来る」の使い方……	1—16
できる……	1—17, 5—32
ふぜい……	2—11
こども……	5—31
挨拶・親切・大切・	
大事・出来る……	5—32
「句読法」と書けるか ……	5—33
かたかな書きの範囲……	5—33

標 準 語

「きれい」と「きれえ」…	1—66
「ニホン」と	
「ニッポン」……	1—95
「はえ」と「はい」……	2—1
私書箱……	3—8
問題のあり場所……	3—35
「うお」と「さかな」……	3—36
「じょうろ」か	
「じょろ」か……	3—36
「国字」の意味……	4—14
標準語の教育……	5—34
馬は uma か mma か ……	5—35
「たっとい」と	
「とうとい」……	5—36

「感じず」と「感ぜず」…	5—36
「表へ出た」と	
「表に出た」……………	5—37
あまつさえ……………	5—37
「アフル」と	
「アオル」(煽)……………	5—38
「まぬがれる」と	
「まぬかれる」……………	5—38
「ちょうちょう」と	
「ちょうちょ」……………	5—38
「欠ける」と「欠げる」…	5—39
「オオグ」と	
「オーグ」(仰)……………	5—39
「オモウ」と「オモー」…	5—39
「負って」と「負うて」…	5—40
「好ましい」と	
「好ましい」……………	5—40
「かつて」と「かって」…	5—40

敬 語

「これからの敬語」につ	
いて(部会長報告) ……	1—72
「社長」と「社長さん」…	1—76
女子の「～くん」……………	3—38
「これからの敬語」	
(全文)……………	3—59
お見えになりました……	5—41

外 来 語

外国語・外来語の	
表記について……………	1—77

アジアかアジャか……………	1—82
糶・𪚩・𪚩……………	2—9
外来語の表記法……………	3—34
ハンカチかハンケチか……	5—42
「あいすけえき」か	
「あいすけーき」か……	5—43

公用文・法令用語

旧法令の	
一部改正のときは? ……	2—41
公文用語の	
改善の仕事について……	3—15
法令用語改正要領	
(本文)……………	3—16

ローマ字のつづり方

小中学校の	
ローマ字学習について…	2—29
ローマ字つづりと	
現代かなづかい……………	2—37
ローマ字のつづり方	
(訓令・告示)……………	3—39
第1表・第2表の使い方…	4—15
国語教育におけるローマ字	
教育について(本文) ……	5—63

中国の地名・人名

中国の地名・人名の書き方	
の表について……………	1—84

かなの学習

ひらがな本位にしたわけ…	2—42
かなの学習……………	4—21

正 書 法

総かな文にはならないか…	2—41
かたかなの用法……………	3—35

学 術 用 語

学術用語の整理……………	3—13
整理の事情……………	4—26
「学術用語集」の刊行……	4—38
学術用語と当用漢字……	4—38
「学術用語集」の普及……	4—39

く り 返 し 符 号

くり返し符号について……	3—34
くの字符号……………	3—34
横書きの「ゝ」……………	4—12
「々」「ゝ」などの呼び名…	5—44
くり返し符号の使い方……	5—44

く ぎ り 符 号

くぎり符号について……………	3—33
----------------	------

書 式

左横書きについて……………	1—93
	2—23

国 語 白 書

「国語問題要領」について	3—4
--------------	-----

「国語問題要領」(全文)…	3—45
---------------	------

そ の 他

四段活用か五段活用か……	1—69
--------------	------

文語と口語の

混用について……………	1—96
数字の書き方について……	2—22
文語的語句の	

混用について……………	2—43
-------------	------

アクセントの

指導について……………	2—43
-------------	------

国語問題と国語政策に

ついて(概説)……………	4—40
--------------	------

昭和30年度国語教育

研究協議会……………	4—66
------------	------

話しことばの改善について

(本文)……………	5—47
-----------	------

話しことばについて

(本文)……………	5—50
-----------	------

国語改善に関する略年表

(1) 当用漢字表・現代かな

づかい関係……………	5—65
------------	------

(2) ローマ字教育関係…	5—80
---------------	------

昭和31年度国語教育

研究協議会……………	5—105
------------	-------

国語シリーズ

収録資料目録……………	5—113
-------------	-------

国語シリーズ No. 33

国語問題問答

第5集



MEJ 4136

昭和32年9月30日印刷

昭和32年10月5日発行

著作権所有

発行者

印刷者

文 部 省

東京都千代田区神田小川町1の1

竹 田 光 二

名古屋市昭和区白金町2の8

竹田印刷株式会社

代表者 竹 田 光 二

発 行 所

光風出版株式会社

東京都千代田区神田小川町1の1

電話(23)2880・振替東京162599

名古屋市昭和区白金町2の8

電話(8)2586・振替名古屋33253

定 価 7 5 円